石を蹴る

正しさばかりが降りつもり

古林健司

石を蹴る

正しさばかりが降りつもり

古林健司

石を蹴る ―正しさばかりが降りつもり

ひとはときどき　4

Ⅰ　校門にて　5
わが、いとしのコサギ／十字路の女／校門にて／離任式で／水辺の〈通過儀礼〉式のあと／人情無惨／台北点景／年末酔談

Ⅱ　ケツクラカンノン　17
死者の上を吹く風は(1)／死者の上を吹く風は(2)／ケツクラカンノン／消える／「自助」の幽霊／言葉のボタ／大震災一年後／「下中島」から／「人肉を喰はん」

Ⅲ　水辺にて　29
結界／迷路の中の鱒／きつつきの午睡／

Ⅳ　石を蹴る　35
二杯目と三杯目のあいだ／旗と「自由」／新「コーヒーの会」再開案／「教育課程研究集会」メモ／ある論争流れ／「個の声」がリズムとなって……／「日の丸」「君が代」は誰の命令か／石を蹴る／強配二十年目／頭痛待ち？

Ⅴ　帰郷者たち　49
「渡辺荘の宇宙人」／記号の中の〈八重桜〉／「侠なるものをめぐって」／気になる親父たちへ、映画ひとつ／一九九七年 年末所感

Ⅵ だからにもかかわらず　57
だからにもかかわらず／スイスのネクタイ／またまた「校門にて」／「女性」から「順華」へ／「口」で起こした「暴動」の記録／ある機関紙から

Ⅶ 再会　67
私流「あいまいな日本の私」／自転車／再会／ある、遠い手紙のこと／夕立とナポレオン／思いきり咽喉を鳴らして

Ⅷ 風信　75
「怨念」はネクタイか／「窓際族」X氏へ／私信にかえて……

Ⅸ 鳥の闘いへ　81
一切れのニュースから／シナリオ風「もう一つの交渉」／土掘りはかたい道路をうちくだき……／暗喩としての「林檎の木」／二つの手記／正しさばかりが降りつもり／そして鳥の闘いへ／無職少年？／「変わりますか」？／ある「授業」

Ⅹ 箱ひとつ　95
異動希望—北井さん、浅田さんの退職の日に／二十年目の春の夜に／箱ひとつ／「その姿をかしかりけり」—年頭所感／飛ぶ蒲団／「人間ドッグ」にて

私史断片—記憶の闇におびえつつ

あとがき

表　紙　古林健司
写　真　田崎純爾
カット　小黒隆司

人はときどき

人はときどき渓流の奥で死ぬことがある。あやまってか、ある必然によってか、とにかく消失してしまう。そういう死を得たものだけが、その場でその真下の淵の、岩魚に生まれかわることができるらしい。遠い以前には人間だった、といった顔つきをした岩魚の、いささか物憂げな挙措をそのあたりで見かけることがある。そのような岩魚は人に釣られることがない。かれらは断崖にこぶしの花の咲くころ、発情して異性を求め合い、抱卵した雌は、魚とは思えない優雅な身ぶりで岩の襞に身をひそめるのである。そうして、彼らの意思と情操の分身を、その、もっとも天に近い源流に頒つことになる—伊藤桂一著「源流へ」より

春になると渓流に出かけるつもりだ。その淵で、岩魚になったなつかしい人々をさがしてみて、見つからなければしようがないが、見つかれば、やあと　水の奥の彼や彼女に手を振ろう。そして、この「石を蹴る」を渡して、許しを乞う。こんなことをこんなふうに言うなんて、お前さんもまだまだだね、とか、なんとかいわれてみたい。あっちの岩の後にいい雌がいるよ、と誘いそうな魚は、きっとあの人の化身だ。いやいや、退職したばかりのちんぴらをひやかさないでよ、と言って一目散に退散する。

そんな夢を見ていると、私の中で、私の時間が、音を立てて流れ始めた。（二〇〇一・三）

I

校門にて

わが、いとしのコサギ

いまの学校で勤務しはじめた十数年も前のことだから正確な姿を思い出せない。あれはちょうど田に水を引く今ごろだった、足の長いまっ白な鳥が、よく校門の低い門柱の上にとまっていた。

誰だったか、貴種流離譚に我が身を重ねてヤマトタケルのごとくやがて白鳥に転身していくのだと、美しすぎる冗談をいうものだから、イメージを重ねてよく往き帰りにその鳥をさがした。時には、夕暮れのプールぎわに立っていたりした。かれは校門の垣に沿って、校舎全体を一巡して流れている農業用水路の獲物を狙ってきていたのだが、その水路には田螺がへばりつき、いい形の泥鰌さえいた。近所の子どもが放課後時分には、そこに入って、ザリガニをさがしていた。

ずいぶん後になって、ふと気づくことがあった。いつからか、その水路に生きものが寄りつかなくなっていて、鳥も見かけない。

地元出身の同僚に聞けば、その鳥の名はすぐに分かるのだろうが、なぜか聞く気になれない。

こっそり「鳥類図鑑」をはぐってみると、おそらくかれはコサギだ。特徴の説明に「一羽ずつが分散して採餌することが多い」とあり、声は「シラサギの仲間はどれも同じような声を出すので、大変識別が困難であり：：」とあるから確かだ。

播州平野の水田は、大型化がほぼ完了しているという。小さな田んぼでは効率が悪いからと、日本の気候、土地、地味を無視した農業政策が大規模農家だけを残して、他の小さな農家をつぶしたという。いま明治以来の農地の近代化政策が完了したとでもいうのだろうか。大型農地をもちこたえるため、何をつぎこみ何を犠牲にしつつあるのか。水を稲の成長に応じて、自分の手で引いたり引かせたりするための水路はもうない。生きものの、近寄ってくる気配が失せている。

そしてわたしはもう、あのいとしのコサギに会うことはないのだ。（九四・五）

「十字路の女」

会えなくなったのは、前号で紹介したコサギに限らない。

校門を北に走る細い通学路が、五〇メートル先でさらに細い東西の道と交差するあたりに、一本の電柱が立っている。その電柱の陰に、毎朝立っている女性がいた。午前八時すぎ、十字路に全方角から殺到する高校生に一礼している。直立不動の姿勢から腰を深々と折る。遅刻を恐れて視線のとんがった生徒たちには、その姿が見えない。電柱のある角を瞬間走り抜けている彼らには、電柱さえも見えていなかったかもしれない。歩いて通勤していたわたしは、その十字路にさしかかるあたりで彼女の礼に応える準備をする。一礼を返しながら、なぜオレは礼などをしているのかと思うのだが、むこうがひょこんとくるから、ひょこんと返すしかない。 例によって遅刻した日のこと。その十字路にくると彼女の姿が見えない。校門まで来てみて彼女を見た。

左右ちぐはぐな靴下、左肩方向へずれたままのカーディガン、近くで見れば白髪が目立つ彼女がすでに閉ざされた鉄の扉の格子をつかんで校舎を見ている。わたしははじめて口をきいた。「おはよう」「……」彼女はちらっとこちらを見たきり、格子から手を離して引き返そうとし、わたしは中へ入り扉を閉めた。下駄箱あたりでふりむくと、彼女はさっきのように扉の格子をつかんでまたこちらを見ている。

勤続三〇年になる最古参に聞くと、アーあのこ、もう四〇くらいで、知恵おくれだけど、この学校が大好きで、ああして来るんです。入りたかったようです、と教えてくれた。学校が地域と地つづきだったのだろう。しばらくして、彼女の姿は消えた。十字路の混雑だけはあいもかわらない。

鉄格子のむこうの女を見ながらあらぬことを連想した。

「ギャビー！」好きな女への叫びにかぶって汽笛。むなしくかき消えるペペの声。鉄格子をつかむ腕。わたしはあの「十字路の女」とフランス映画「望郷」のラストを重ねて記憶にしまった。彼女が消え

たのは、市が「福祉宣言」を掲げたころだったと思うが、この記憶は、はっきりしない。（九四・七）

校門にて

小さな女の子の、ふりしぼった声が聞こえる。「いややーっ」　それに追いすがるようにして、間抜けた男の声がする。「なんでやー」　しばらくの沈黙のあと、芝生の上をガサガサと走り回る足音がする。気がつくと職員室の窓に数人の教師がすでにはりつくようにして校門前の出来事を見ている。窓際で居眠りをしていた私も何事かとのぞいて見た。小学生ぐらいの女の子を、作業着の男が追っかけている。そのうちに校門前の石橋の中に女の子はもぐり込んだ。この季節、水路に水はない、が落ちつかない。そこまできて私は現場に立ち合うことにした。

近づいていくと、石橋の下にもぐりこもうとしてもがく男の背中が見えた。「どないしたん？」と声をかけると、ゴミにまみれた顔で男が振り向いた。「娘でんねん、あかん、出てきまへん。せんせいでっか？すんまへんが出してもらえまへんか」という。男を遠ざけ、中を見ると女の子は膝を抱えて、こちらを睨んでいる。ゾクッとくる目つきだ。「おいで、汚いぞそこ、おいで」「いやや、お父ちゃんおるやろ」とやっているうちに女の子はそろそろと近づいてきた。出てくるなり私にしがみついた。遠くに親父の姿を見るなりまたもどろうとするが、男に「姿を見せるな」と怒鳴って女の子と話していると、近くにおばあちゃんの家があり、そこへ親父がきたので逃げたということだ。背景は想像できる。すぐおばあちゃんの家へ帰ること、親父は、私が自動車で親父の家まで運ぶことなどを約束した。男には今日は出直すこと、子どもには嫌われてなんぼだということ、などを話し車に乗せた。送り届けて学校に戻ると、先ほどの見物衆のうちの一人が、「金とられませんでした」とたずねる。「いや」というと「それはよかった。あの親子は常習で、ああやって小銭をせびるんですよ」

突如私に、しがみついてきた女の子の小さな手の感触がよみがえった。あんな芝居ができる子などいないよというのも、めんどうなぐらい妙な疲労感の中にいた。(この、わけ知り顔のリアリストは、ぽつぽつどこかの校長さんになるということらしい、蛇足ながら。)(九四・九)

離任式で

K君の子どもが便秘になり、飲み薬や浣腸など、いろいろ試してみたが効果がない。そこで奥さんがどこかで聞いたことのある方法を実践してみた。すると効果はたちまちあらわれ、無事、見事なモノがあふれんばかりに排出されたと嘘のような本当の話を聞いた。舌で丸く変形させたキャラメルを肛門に挿入するのがその方法であるらしい。K君は「……その丸めたキャラメルを人差し指で、ゆっくりと奥の方へ押し込むのです……」と人差し指を立ててていねいに話している。

今年の離任式の挨拶は、K君の、その〝生温かな話〟が他を圧倒した。君たちに残せる話は、そのようなものですともつけ加えた。

やってくれるやないのと、体育館の壁にもたれてK君の話を聞きつつ、どういうわけか、母親のことを想い出していた。学生時代――時は六〇年安保　冬二月、月の冴えわたった夜、いつものことだが金が全く底をつきとりあえず、友人に一区間の汽車賃を借りて最終便で帰省することにした。簡単には家に帰ったりはしなかったが、その夜は何かがちがっていたのだろう。キセルの私の立場としては検札の車掌から逃げるしかない。追われてついに外に出た。S駅―京都と故郷の中間にある駅だ。そこの公衆便所にとび込んだまではいいが、そのままくり抜き式の穴から垂直に落下した。その先は想像におまかせしてもいいだろう。

私は夜中かけて線路を歩き、家に辿りつくと、流し場で素裸になり体を洗った。出てきた母が、

「どないしたん。おまえなにしてきた」といいつつ、四つん這いにした私の体を洗った。要するに、何だか六〇年安保もこれで終わりだなと思いつつ母の手にまかせていた。

K君の話が、そんな夜を連想させた理由はわからない。強いていうなら、私は自分の離任式の話をさがしていたのかも知れない。K君は着任式でも「キャラメル」を話したという。つまり、「さよなら」とも、「がんばります」ともいわずにこの時期をのりこえたことになる。真似て、できる芸ではない。（九六・四）

水辺の〈通過儀礼〉

立ち寄る場所とて、特にない町に住んでいるからなのだろうか、よく意味もなく河原に出かける。何があるわけでもないが、水の近くで寝転ぶのが好きで十年来の習慣になった。　雑踏では人と出会うこともないが、水辺ではかえって人と出会うことがある。二年前その河原でTさんに出会った。彼は人づきあいに疲れてはよく川を見に来るという。そこは私とちょっと違うのだが、水が好きなところは同じだ。そこで話がかたまった。「ボート部を創ろう」　Tさんは、ボートの経験があり、コーチとしての力倆もある人だ。生徒を集めて、Tさんに引き合わせるまでが、私の仕事だった。どういうルートで集まったのかは、未だによくわからないが、とにかく十人ほどが応えてきた。

練習の度に、遊び道具とお菓子を持ってくるY、柔道の師範と口論して退学、一年遅れでこの学校に入学したS、大人くさい話し方だが、ロックになると人の変わるM、すぐにへたばりそうになる胃弱のK、来る度にファッションの違うS、家にいろいろありそうだが、ニコニコしているN、ほとんどどの授業でも寝ているM、彼女にまといつかれているQなど誰を見ても、運動部の部活向きライフスタイルを身につけたのはいない。どこにもいそうな高校生だ。Tさんはとりあえず絶望し、私の方

をうらめしそうに見た。が、一年先の高校総体出場を目標に掲げて、それなりの練習を重ねた。彼らは三年生になった。掌を血まめでいっぱいにして出場することになったシェルフォアの千mレース。最後の追いこみ百mで力つきたが、Tさんはゴール地点までボートに伴走しながら、「行け行け行ってまえ」と怒鳴り上げている。入賞を逃した彼らは明るく「これでカラっぽや」とつぶやいた。Tさんと私は自己最高のラップタイムを出した彼らに、拍手をし、労をねぎらった。彼らは二人の教師を胴上げし川に投げ込み、自分らもてんでに飛び込んだ。それはとつぜんの祝祭だった。

規則正しく流れる学校という制度的な時間を消化するだけなら、自分は果たして門をくぐり抜けたのかどうか戸惑うばかりだろう。もしかして、少年が大人になるために自分たちだけの関門を自らの手で作り、それを本気でくぐり抜けようとする苦闘をいま闘ったのではないか。水辺で出会ったから、Tさんにも私にも、彼らの祭りがそんなふうに透けて見えたのかも知れない。（九七・三）

式のあと

卒業式も半月前にすんでその間に、それなりの大掃除もあったはずだが、元三年の教室をのぞいてみると、なぜかゴミがある。立ち寄ったついでに、ついつい入るのだろうが、弁当の領収書、柔道着、空き缶などにまじって、クシャクシャの情報紙があり、拡げてみると「ジグザグタイムス」とかいうアルバイト情報の切れ端だったりする。参考のために、そのコピーを紹介してみると、

――あなたも月収三十万、一流ホテルの顔になる　――超ド短期！　一日だけで九千七百円

――アルバイト選択のポイントはやっぱり時給。学校帰りに四時間働いて五千円以上。Pホテルなら週四日勤務で十万円　――午前中三時間だけ、男子大募集

だいたいこんな調子だ。共通するキャッチコピーのポイントは、短期、即金ということ。これは古くて新しい若者誘惑のためのキーワードである。ただし、量的には昔のそれとはくらべようもない。

私は、その情報紙をていねいにたたんで、なにかの記念のように胸ポケットにしまい込んだ。あの卒業生たちが、現役のあいだに決して明かさなかった秘密を手にいれたような気分だった。もっともそのあとすぐ捨ててしまったが……。

学校に迷い込んで来た犬を宿直室で大事に育てていた化学の教師が、犬がいなくなった夜、飲みながらおいおい泣いていた。高校生の私がたまたまそのくりごとにつき合わされた夜のことを思い出す。それは卒業式間近のことだった。

犬の話はいつのまにか「勤評」の話になり、校長の悪口になり、最後に「若いから何やいうねん。え、えらそうにすな」ときた。彼は次の年、学校から消えた。からまれた生徒もいつのまにか教師になっていた。その頃私ももっていた「短期、即金」で自由に生きてやるという野望も、いつとはなしに消えた。

今になってそう思うのだが、あの頃の教師は、生徒をつかまえてはよくからんできた。若さゆえの無知に苛立って毒づきたくなる、それ以上に裸で生きていた気配がする。寄せ書きの中の「羽抜け鶏抜け放しで遊びをり」という、その教師の句はそろそろ他人事ではなくなってきた。（九七・三）

人情無惨

父子で暮らす、部落出身生徒が、「暗い」という理由で今年の某企業の採用試験を落ちた。そんな播州

北部のN高校の報告を聞く機会があった。その相も変わらぬ、「不調理由」報告に質問したことがある。暗いという理由で採らぬという企業に、何をもって向き合ったのか、親父と暮らす、部落の生徒がそんなにも明るくなくてはいけない理由があるのか。何年も繰り返してきた、この連続する問いに対する反応もないまま、横合いから顔を出した、その集まりの責任者とかいう（名前は知らない）某高校長は、「企業よりも、私たちが自立した強い子を育てなければなりません。厳しく……」と閉会の辞を述べたてた。その質問はその後、どうやらその筋で物議をかもしているらしい。私をある位置から外せといった動きがあり、お好みどおり外れてやると返事をすると、動きはピタリと止んだ。それはそれでいいのだが、いったんひっかかった問いには忠実であるしかないのだ。そんな問いに導かて、私は教師でありつづけたのであり、それ以外のことは、何も持ち合わせていないからだ。

その少し固い頭で想像してみるがいい。その生徒の、わびしい食卓を。彼が米をとぎ、親父が魚を焼き、時折、罵り合い、疲れて、卒業を楽しみに地元企業に就職を決意した高校三年生を。暗くていいのだ。そのうち可愛い娘と世帯をもって、自立して、暗かったから明るくなれる表情を身につけ、ゆっくり大人になってゆく、小さな小さな生涯を。

「厳しく育てる」などは、「人情の機微」さえ心得ぬ者には所詮、無理な相談だろう。

「人情の機微」といえば、藤沢周平をこともあろうに、始業式の訓示に長々と引用した校長がいるとも聞いた。ブームの藤沢周平は、教師の指導者言語が羞しく、ついてゆけなかったから作家になったということも知らずに。たとえば、「小さな橋で」の少年の悲哀から何を読んだのか。「本所しぐれ町物語」のおきちのけなげなさを、どう読んだのか。そんな子らを前に、「暗い」とは、結局何を言ったことにもならない。自分の表情を、鏡で見るとわかるはずだ。決してそれほど、明るくもないことか。（九七・四）

台北点景

学年の打ち上げに台湾に行って来た。とにかくはじめて、旅券の必要な旅をしたということになる。二泊三日。なにをしたことにもならないだろうが、この、のろまな視野に、それでもいくつかの点景は残った。そのうちのひとつまみを——。

焼け跡　台北の中心をバスで走っていくと、震災直後の神戸のような焼け跡があった。その広大なエリアを囲む道路に駐車している車は、傷だらけだった。そこでガイドにたずねた。「これ、新聞に載ってたね。当局が焼き払って、住民が暴動を起こしかけたという、アレでしょ」ガイドは、顔をしかめて、「しょうがないのです。ここにいる人たちは、別の場所に住むところをもっているのに、ここで店を開いて、そこで住んでいるのですから」このガイド女史は、そこでむっつり黙ってしまった。

檳榔（びんろう）　中華風雑多的混沌状態の看板の中で、ひときわ頻出度の高いのが、この「檳榔」である。車内の誰に聞いても要領を得ない。そこでまたガイドに聞いたのだが、「おいしいもんじゃないですよ。噛みタバコのようなもんです。」私は、「恋恋檳榔」などといった桃色看板を横目で見ながら、ガイドに聞くのは止そうと考えていた。帰って広辞苑を見ると、「好色一代女」に「—の買置して家を失われける」とある。これはいよいよ気になる。

魯迅　本屋へ行って、ルーシュンなどとたずねたが、分からない。入った本屋が悪いのだろうが、一冊くらいは置いとけよ、と外へ出た。のちにガイドにたずねたが、さっぱり知らない。

週末にはアメリカで息抜きをするという、このキャリアウーマンに、聞いてはならぬことばかり聞いたのかも知れないと、今思う。

この国の差不多（ちゃぶどう）（だいたい、およそ）文化は、寛容ではあっても、「不公平」な部分がある。そこ

がアジアなのだと思うのだが、「公平」にするため、住・商混住の後進性に規制を働かせて、近代化していくといった大義が政府を駆り立てているとあとで知った。いずこもいずこ。もいちど映画「悲情城市」をゆっくり観たくなった。（九七・五）

年末酔談

とくにすることもないので、近所の農家から迷い込んで来た鶏に、コンビニで買ったパンや福祉施設から配られたパンなどを与えて遊んでばかりいる校長がいた。見ようによれば田舎の高校の、小春日和の点景のようなこの風景を生徒たちは毎日目にしていた。逃げる鶏の足は、暇つぶしで取り押さえられるほど、のんびりとしたものではない。取り逃がす度に生徒たちは笑った。近隣でも自慢の正面の校庭、ロータリーの植え込みに逃げ込んでは芽のついた木々や草花を狙いうちする。被害は甚大だ。ところが、追いまわすことが意地となった男の目には、鶏によって丁寧に、かつ微妙につつかれた枝や草の先は見えない。いきいきハイスクールとかで、園芸の心得のあるひとりの教師が丹精こめて育てあげた葉ボタンは玄関前で、骨だらけの裸にされたまま、師走の風に吹かれていた。

後日譚がある。男は校務員さんに命じて、しっかりした鶏小屋を造らせた。ところが、その中に入るはずの鶏は、いつの頃からか行方不明。茫然とあたりを彷徨する男の姿を私も何度か目撃している。みんなの噂では鶏の飼い主がつれもどしたとか。あたりまえといえばあたりまえの結末だ。新築の鶏小屋は、これもある教師に命じて空のまま自宅に運ばせた。校務員さんには、礼の一言もなかったという。福祉施設などへ配る葉ボタンの被害への謝罪もなかった。

ところで、ユージローなどがアイドルであった世代の私は、意外なことにウクレレが弾けるのだ。忘年会の席で、そのウクレレを披露した。♪コーチョーセンセイ　鶏好きで／〇〇先生　葉ボタン好

きで／鶏太って葉ボタン枯れて／これで〇〇高校もバンバンザイ／アーヤンナチャッタ　アーオドロイタ。むろん自作自演。学年全体が盛り上げてくれた。男は暗い酔いのなかに居たはずだが、事実は分からない。

ちょっとした「権力」を手にした男がすることとしては忘れられない話になってしまった。男の、陰で威張る口癖は「ワシの気に入らんヤツは、みな飛ばしたった」ということらしい。校長特権の天下り先の某専門学校であいかわらずそういう下品低劣なタンカを切っているという。

鶏一羽つかまえられぬ男が「ナンデモデキル」と、まだ思っているのだ。この時期、このミレニアムなどといわれる年の最後に想いうかべる風景でないのはわかっているが、とりあえず、年末酔談ひとつ。

（九九・十二）

Ⅱ

ケツクラカンノン

死者の上を吹く風は（1）

岡本で車を捨てて住吉・甲南と、瓦礫の中を進みながら、私と息子は話す言葉を無くしていた。話すことが、何かをはぐらかすことでしかないような風景の中にいた。たまらず、こうやって歩いているけれど、人の上を歩いているんやろかと懐中電灯をもつ彼がいう。そうかもしらん。事実、私らの行く手には破壊されつくした家の壁や屋根や垣根らしきものが続いた。そこを越えて行かねば、娘の下宿先の「青木」には行きつかないのだ。電線がすだれのように垂れている。後半分を、倒れた庇に呑まれたままの自動車からエンジン音がする。人がいるのだ。瓦礫の果てた所に老女らしき影がたたずんでいる。静かでまっくらな明け方だ。ほこりが目や鼻の粘膜にへばりついてくる。テレビは何を写しとんや、息子はのしかかる重みをはね上げるような声でいう。「生き埋め」の数が増えていくが、あれはどんなシステムで勘定しとるんか、勘定しとる暇があるなら救出するのが先やろに。大通りを出たあたりで息子は姉の名前を呪文のように唱えた。

地震直後にかかった娘からの電話は「なんとか脱け出した、パジャマのままで逃げた、まる焼けになった」とメモ風の喋り方で切れてしまったが、無事であることを告げていた。すべて後で分かることだが、その電話は小銭をその場で借りてかけた電話であった。十円分に整理された文体が、どれほど私たちを落ちつかせてくれたことか。そのあと、近くの「青木市場」の人たちと共に避難し、毛布とトイレットペーパーを盗み（としかいいようがない）本庄中学の運動場の焚き火で一昼夜を明かした。倒壊した家を見て、実母の生存を諦め、大阪に帰ろうとする焚き火の環の中にいた人の車に同乗させてもらい、二千円をもらって友人の家にたどりついたという。何と多くの人の中で、彼女のその日の生が支えられたことか。それにしても、娘の使い慣れたもの、自力で揃えたもの、贈られたものがすべて燃えた。そしてその日の記憶だけが残った。そして私には彼女が残った。

避難所を一日さがしつづけたが見つからず、無事に友人宅にいるという連絡がついた時、私と息子は、車の中で眠りこけていた。（九五・二）

死者の上を吹く風は（2）

息子のいらだちは、私のそれでもあった。事故の深さを物の崩壊や、避難所の群像をあげつらうことで語られる情報が連日つづく。死者の、それも個々の死に至る事情は想像の中で膨張するばかり。死に触れることが禁忌となっていくことへの焦燥が鎮まらない。「即死70％、圧死90％」という発表はあった。十七日から十八日にかけての、あの黒くて静かな、埃っぽい位置から、その公式発表をみる限り誰がどのように調査をし、集約をした結果なのか。推定として密造された数字が麻薬のようにばら撒かれる。しかし、「だから不可抗力なのだ」といい張るもののおびえが見えるばかりだ。

私とこどもたちは、あの日の瓦礫の上に立ちつくしている、無力に——

ところで私の知る限り、はじめてそれに触れた発言を見た。

……戦後最大の犠牲者を出した初七日に国民が喪に服した連帯のメッセージを送ることもできたはずだ……（野田正彰氏、二月十五日付神戸新聞）

野田氏の発言を引くまでもなく、初七日に全国民が喪に服さなかったという事実こそがこの災害の深さの核にある。あの「大葬の礼」に、洗練された指示系統を通じ、即座に、かつあまねく全国民に動員をかけ得た権力だから、生者救出のための、あるいは庶民追悼のための指示系統など幻想なのだ。もともとあるわけがないのだ—ほんの昔、そうであったように。が、庶民はひたすら手を合わした。

初七日の焼け跡には花が点々とした。ぽつぽつこのへんから、追悼、哀悼がつづき、泣きが入り、碑などができ、死者の上を「復興」の風が吹くはずだ。死者はせめて「初七日」に野辺送りを—という残された者の無念を包囲しながら、そこにそれがなかったかのような日々が過ぎる……。(九五・三)

「ケツクラカンノン」

避難所となっているH高校で、「第一班の班長」だというTに遇えた。体育館入口のロビー正面に不機嫌な顔で坐っている。「班長は、特権を使ってモノを独り占めしてはいかんから……」というのだが、彼の家族のスペースは、しかしどう見ても貧弱であり、周囲にくらべても不公正なのだ。寝るときは米の字。何重もの毛布が敷蒲団であり、掛け蒲団だ。寝具の救援物資がひたすら毛布に限られていたためだという。「それでも班長ちゅうのは…」というTにとっては、ほぼ二十年前もそうであったように「男気」だけが身上であるらしい。子供が二人いて、上の娘はもう子を産んでいるので、「わし爺ちゃんになってもた」と四十半ばの爺が笑う。Tは体が不自由なまま年相応に太って見えたが、どうも投薬による副作用のようだ。そんなあやうい貫録のまま茶をすすめてくれる。

つんと背をつつく人がいて、振り向くとロビーの陰にへばりついて老夫婦がいる。Tの叔母だというその人は「せめて綿入れの蒲団で寝たいよ、ニイサン」「立ち退け、立ち退けいわれて、三日、壊れた家でがんばったけど、避難所へ入ったら最後、市の役人はそのままケツクラカンノン、ただの一度も顔見せへん」「ここでこのB町の市住で骨を埋めたいのに、とうとうルンペン……」と、いきおいをつけて語り継ぐのだが、どうしても涙があふれてくる。横で、八十一歳で心筋梗塞のつれあいがみのむしのように寝返りをうった。　ニイサンとは、私のことだがこの身動きならぬ家族にとっては私ごときが立派にニイサンに映ってしまうのだ。避難先の学校では授業が始まり、「班長」たちはさ

らに追いつめられていくだろう。あの、「死」を覆う情報の波が、生あるものの砕かれた日常をも洗い始めている。（九五・四）

消える

その避難所の二階ギャラリーには、夕餉を取る人々が満ちていた。自分を消して、幾家族もの食卓の側を通り過ぎねばならない。自分を消したつもりが、めしを頬ばる人と眼が合うと爪先立った足も止まる。この奥に彼はいるはずだ。照明の真下で、妙にくっきりと浮かび上がった円形のちゃぶ台（どこから、ひっぱり出してきたんだろう！）を取り囲み、端正に坐って食事する四人家族のむこうに、キム親子はいるはずなのだ。が、姿はない。隣人の父親らしき人に、「お隣は？」と聞くと、その人は箸を動かしつつ「たぶん階下でしょう」という。その階下は人であふれかえっている。書き置きでもして今日は帰るか、と、考えていた。

すると、やはりキムは大声で笑っていた。その声は一階の隅から聞こえ、雑然とした人々の群れを抜け、一直線に私の耳に届いた。やはりというのは、キムに関する私の記憶は常にその特徴ある声からはじまったからだ。そのとき私は、彼の姿ではなく、彼の声をさがしていたことに気づいた。二十年ぶりの、その声に向かって人混みを行くと、子どもと遊ぶ四十男のキムがいた。崩れた家から母と二人で脱出し、しばらくここにいたが、母は大阪の妹にひきとられ、自分ひとりであること。崩れた家も、勤務先のゴム工場も焼け、近所も職場もごっそりここに避難していること。貯り工一筋二十年、小銭だけは貯めてきた。「しゃあから、通帳だけは持って出た。アトはパアッ。ホゴは取らん。シゴトよシゴト。この前、駅前で解体屋のオッサンがおったんで、シゴトくれシゴトくれいうて、オッサンの背中に一日中はりついたったら、コンマケしてアーワカッタ、今度のキンヨー、駅前にコイって

いいよった一。後日譚だがオッサンは結局来なかったとか。オッサンが駅前から消えたという電話があり、しばらくして訪ねるとキムもそこから消えていた。

あの日、別れぎわに「あこはオバケが出るで、人がいっぱい焼け死んだんや」とキムの教えてくれた真っ暗な高架沿いを歩いていて、ふと見ると後を歩いていたはずの老婦人が消えていた。（九五・五）

「自助（セルフヘルプ）」の幽霊

「私のところへ三十前の警察官が来て言います。『両親の家も全壊で、遠くの仮設へ行った。給料の90％を交通費に使っている。やむを得ないということで頑張っているんだ。そんな人もいるんだから納得してもらわんと困る。移る義務がある。拒否するのはわがままだ。』と言うんです。」「近くでなければ生活できません。生命が守れません。守ってくれるのなら、遠くの仮設で1年や2年我慢できるかも知れません。しかし、先が見えないのです。ここでしか生活できないものを、わがままという。理解できぬことです。」

夏休み中に、避難者・被災者の連絡会などによる神戸市交渉があった。そこで配られたビラの一部である。

「8月20日、避難所閉鎖と災害救助法適用打ち切りの通告を撤回せよ」という切迫した要求を中心に、避難所の環境条件の整備、民間の集合住宅再建のため、長期・低利の資金援助実施、零細・小規模事業者へ「無担保、無保証人」の緊急融資、といった当面の要求に対して、市側が具体的にどう対応しているのか詳しくは知らない。知らないが、その日の交渉には、時間を過ぎても市側は顔をあらわさなかったということで、すべて明白だ。要求に対して「わがままだ」と逃げながら対応してい

る。しかし、わがままといういい方は表には出ない。それは市民感情を逆撫でるので、このところまたしてもというべきか、あいかわらずというべきか「自助努力」ということばが表舞台をとりしきる。

行政側が少数者をしぼりあげ、孤立させるために使うこの一語は、部落問題や障害者問題などの、さまざまな局面で多用されてきた。自助努力を怠り、要求ばかりするな——といった押しかえしが時には効力を持ち、要求を少数者のわがままという次元に引きずりおろす。私たちの業界でとくによく起こる話でもある。「週刊プレイボーイ」連載の鎌田慧によれば、復興計画は、市、県、大手ゼネコンによって震災後二週間目にはできあがっていたという。その計画実現のため、忍びがたきを忍び自助努力せよ、と「自助努力」する人、「がんばる」人を前面に押し立て、一万数千人の「わがまま」集団を包囲すれば、復興計画は安泰というわけだ。しかし、冒頭の手記のどこにわがままがあるのか。普通の生活者を一万数千のわがまま者といいくるめるのに、今回だけは、「自助努力」の霊力は通用しないだろう。二十数万といわれた被災者の数が減るはずもなく、しかも避難者は避難所にいる人のことだけ指すのではなく、被災者の別称にすぎない。しかもそれは、死者六千人を含む被災者なのだから。復興計画は先ず死者に聞くがいい。その上で、死者に自助努力を諭してみればいい。

ちなみに明治四年刊、サミュエル・スマイルズ著、中村正直訳『西國立志編』別名『自助論』が「自助努力」のルーツである。儒教的要素と合体して生き延びてきた、この幽霊のような実践道徳が、戦後五十年目の、大都市神戸で踊っている。（九五・八）

言葉のボタ

かって、筑豊の故谷川雁が、ここにいると次から次へ、言葉がボタ山のボタのように増殖してきて、ついにそのボタ山があふれかえり雪崩みたいに降りかかってくるというようなことをいっていた。誰

にもそんな瞬間があり、そこを過ぎるとなぜあんなに言葉がザワついたのか、定かには思いだせないといったことがある。私に関していうなら、言葉はただいま、いたって静かだ。あふれかえるなら、私の受け持つこの欄はとっくに狭すぎるはずだが、毎回、ちんと　おさまってしまう。妙な傾きの中にいるのかも知れない。警戒おこたりなくいくしかない。ただ、最近は、ＪＲに乗るたび加古川から明石あたりで言葉はそよぎはじめ、明石から須磨にかけて言葉は鎌首をもたげ神戸の都心までくると、中途半端に欠けた言葉が残骸のように風に吹かれて鳴り始める。そこまでくると私の背丈を越えた言葉のボタ山が見えてくる。ゆすぶられて、不安な風景の中をひといきにすべっていくしかない。

《それにしても、オレたちの自前の「震災記録」ひとつないのは、どうしたことだ……》すべりつつ、ウトウトとそんなことを考えていたりする。《だれもかれも言葉のボタの下で圧死したとでもいうのか……》

ある日、県立尼崎高校教諭の中村忠生君（彼は私の前任校での教え子でもある）から手づくりの、分厚いレポートを贈られた。震災後の事実の断片と、表現になりそこねた言葉がしがみついているといったレポートだ。この〈記録〉に向かう意志の、もちこたえように息がつまり、せつなくなる。地震の直後の一月二十日、七・八時間かけ「故郷の長田」―筆者によれば「原風景」を確かめに出かける小さな旅、そこで出会う死さらに教え子の死など。胸を衝くのは、その旅のあと担任するクラスの生徒や親に向かってする、自己告白である。そこでは、おそらく地震がなければ門外不出のまま彼の中で朽ちたであろう記憶がゆりもどされ、晒されている。記録というよりかきあつめるだけかきあつめた自分のかけらが、未整理の、怒りの表情のまま、投げ出されている。

言葉のボタが崩れてくる。その防ぎようもない、圧倒的な力に、小さな闘いを挑む彼に「記録」するものの孤独と、「記録」することの原形を見てしまった。（九五・十一）

大震災一年後
――誰がウソをついたのか

大震災から一年。さまざまな慰霊行事や、さまざまなメデイアに「総括」があふれた。一・一七の「犠牲者の追悼式」には皇太子夫妻や首相が参列し、官公庁、民間を問わず学校なども「喪に服した」。校門には半旗が掲げられ、授業途中の正午に全校放送で黙祷が告げられた。これは「大葬の礼」以来だ。わが生徒たちも一様に眼を伏せ沈黙した。私も教壇で眼を伏せ、ちょっとしてから半眼で彼らを見ると案の定二・三人私を凝視している。眼と眼がぶつかった。私は眼を閉じた。そのまま半眼で見つめ合うわけにもいかないだろう。

その日の授業で私は、「ボランテイア」で、K高校へ行った時の話を思い出すままに紹介していた。

「決まった時間に、食べ物を仕分けして被災者に手渡す作業をしていた。私の横に、ある高校の生徒たちが数人並んでいて、機敏な手つきで行列の人たちに弁当を渡していた。そのうちに奇妙なことに気づいた。『弁当五つ頂戴。5人家族です。』という老人に『三つです。』といって、その高校生は三つしか渡さないのだ。『五つ渡してやれよ。弁当あるじゃないか。』と私が口を出す。『そういわれているんです。ウソをつく人が多いので、三つ以上は渡さないようにと』、そこで『いいよいいよ、弁当はある。一人で二つ食いたいと思ってる人がいたとしてもいいじゃないか。』『……』私と高校生はそのあとしばらくニラミあっていた。私は五つという人に五つ渡した。しかし、三つしか渡さなかった高校生を叱る気はしなかった。ただ彼は、私の横を離れ、遠くの方でその作業を繰り返していた。見事なボランティアをしていたのだ。しかし三つにしたか五つにしたか私にはわからない。そのウソをついたのは、被災老人か、高校生か、高校生にそう指示した役人か、それとも私か、いまだにわからないんだ。」

一・一七からしばらくして、今、崖崩れのために傾いた家と格闘しつづける、F先生から聞いたは

るか昔の言葉を思い出していた。「ウソがどうした。ウソをつくなと教えるのはまちがいだ。ウソをついてしか自分を守れない庶民もいるのだ。ウソをつくなと教えるのではなく、権力側の巧妙なウソを見抜く知恵を教える、それが教育だ」。震災の後、大好きな神戸の街歩きをやめているというF先生は三十年も前に私にそういった。たとえば、黙祷から脱け出して来た「眼」、ボランティアの意味を苦くみつめていた「眼」に向かって残せる言葉など今の私にはない。ただし、引用ひとつ――

青年はどうしてあの金看板をかけている指導者を求める必要があろう。それよりは友を求めて、一緒になって生存できると　思われる方向へ歩くに越したことはない。君たちにあふれているのは元気な力だ。深林に出会ったら、切り拓いて平地にすること　ができるし…（中略）、いばらにふさがれた古い路を聞いて何になる、黒けむりの毒ガスの阿呆指導者を求めて何になる！　――魯迅

（九六・一）

「下中島」から

……「人間の顔」をしている下中島公園のわずかな人たちは、どこかの仮設住宅で人知れず亡くなった人たちの魂がせめて安らかに眠れるよう、お葬式の世話までしている。（中略）こういうことは「ボランティア活動」をはるかに越えていることだと思う。単なるボランティア活動であったなら豊かな社会を前にして3年間も続かないだろう。精神的、肉体的過労で倒れるはず。他人のために動いているボランティアは、芯のところで受動的になりがちで疲れる。下中島公園の人たちは他人のためと同時に、自分のために動いている。そして芯のところには、よりよい社会を作りたいという創造の願望がある。芯のところで積極性があるからこそ「人間の顔」をしている。（中略）経済という歯車を無断で走らせている日本社会が最も必要としている、最も必要としているから最も恐れられている〝アナーキー〟を作っている。新しい文化だ。下中島公園の泥の路地に、私はそのような光をみかけた。（「人と人をつなぐことから」―阪神大震災被災者の記録・『下中島公園北ニュース』縮刷版―の中の「『人間の顔』をしたアナーキー」筆コリーヌ・ブレ〈ジャーナリスト〉より引用）

「下中島公園ニュース」が縮刷版の本として発刊された。是非一読をすすめたい。あわせて、七月のはじめに「下中島」から発信された「抗議」を紹介する。

……あの地震からわずか半年後、多くの被災者が学校などで避難生活を送っているにもかかわらず、災害救助法を打ち切り、避難所から辺ぴな仮設住宅へと追い立てた……。この時の私たちの口惜しさは一生忘れぬことです。

故にあなたが今回発言した『避難所（注・兵庫高校）で退去命令を用意していた』と言う言葉を私たちは見過ごすことはできません。被災者に対するあからさまな敵意を隠し持ちつつ、我々に対応してきたあなたの欺瞞、いや行動の欺瞞を許すことはできません……。抗議の宛て先は、尼崎南高校長・佐野

「下中島」という位置から見える風景。その風景の中で、私たちはまだ、「人間の顔」をしているのだろうか。フランスの一ジャーナリストの眼に映ったほどにも、私たちに「新しい文化」は見えているだろうか。（九八・七）

「人肉を喰はん」

「大震と猛火とは東京市民に日比谷公園の池に遊べる鶴と家鴨とを食はしめたり。（中略）　されど鶴と家鴨とを、―否、人肉を食ひしにもせよ、食ひしことは恐るるに足らず。　（中略）東京市民を獣心なりと云うは、―惹いては一切人間を禽獣と選ぶことなし云ふ　は、畢竟意気地なきセンティメンタリズムのみ。自然は人間に冷淡なり。されど人間なる　が故に、人間たる事実を軽蔑すべからず。人間たる尊厳を抛棄すべからず。人間を食はず　んば生き難しとせよ。汝とともに人肉を食は

ん。……」

これは関東大震災のことを「天譴（天のとがめ）と思へ」と言った、「家すら焼かれざる」澁澤子爵の言説に対する芥川龍之介の反論（大震に際せる感想）の一節である。

二年前の震災以来、古本の数が防ぎようもなく流出し、思わぬ掘り出し物が、百円で手に入ったりするといって、知り合いの書店主が見せてくれたのが、岩波版の芥川全集六巻だった。不勉強にして、私は芥川のこの一文を初めて目にしたのだが、アッと思った。

阪神大震災から二年近くたつ。三度目の冬だ。公園や旧避難所の学校などで暮らす人は約百三十世帯、二百六十人。多くの被災者が仮設住宅に移っているなかでの、二百六十人だ。ニュースを送ってもらっている須磨区下中島公園の一一人の被災者も落ちこぼさない」ための闘いや、市立の学校施設からの立ち退き強要に抗議する芦屋市仮設自治連合会の闘いが、何に包囲されつつあるのか、私の震災への関心はほとんどその一点に絞られている。あとは、「畢竟意気地なきセンティメンタリズムのみ」。ついに、生きる場の哲学が問われる時期に入ったということか。エゴを越え、みんなと生きること。そのような実践思想が、灰の中から、芽吹きはじめている。

芥川が「人肉」を食ったとは思えないが、鶴や家鴨を食った人の側に立ったことだけは確かなことだろう。私はあの時、避難所で配られた「弁当」のことを思い出していた。一人が二箱要求したからといって、避難者を「禽獣」扱いした役人よ、教師よ、高校生ボランティアよ。君らの価値観こそが、下中島公園の闘いを生んだのだ。一つという人に、黙って二つ渡した人だって何人もいたことを憶えておくといい。そしていまは、避難所、仮設、市住といった箱の呼び名でしか「生活」を語れない者から遠く、「みんなと生きる」ことの内実が、静かに持ちこたえられていることを。（九六・十二）

Ⅲ

水辺にて

結界

その日に限って、小さな型ではあるが岩魚はよくつれた。清流を上りながら同行の名人（？）が、ある淵にさしかかったとき竿を置いたまま、何かを呟やいた。確かに何かいったのだが、瀬音でよくわからない。えっ？と聞き返すと彼は、少し照れて「結界を感じる」といっている。ケッカイ？と口の中で反芻してみて、やっと腑に落ちたのだが、それと同時に、両側の深い雑木と頭上を覆う山の息づかいが、妙に生臭く感じられ、私の水の中の足はある畏れのようなもので釘づけになった。要するに暗示がかかり易いのだといわれればその通りだが、その時、私の眼前一米の清流は、結界線の透明な幕の向こうで光っていた。竿をそこで納めたのは、私がもうかなりの年であるということだけでなく、厳然と拒絶してくるものの存在に触れたからだ。と、今でもそう思っている。「もうこれ以上釣れない」という名人に従って歩きながら、少年時代、私たちは結界を感取する能力を持っていたはずだ。とか、あつかましく成人し、ズカズカと人の中に踏み込むことを生業としてきたわが身を想ったりさせられる釣行であった。

結界とは大仰ないい方ではあるが、学校という場の中にいて、それを感じる瞬間がある。

これ以上踏み込むと何かが壊れるという予感と、成長しつつある人間への畏れのようなものの前で、自らの言葉や行為を禁じるという経験が、いくつかある。渡り廊下をすうっとやってきて階段を上がったかと思うと、すうっとまた降りてきて、ちらっとこちらを見て遠ざかる、そんな生徒がいる。この空間の中で彼は魚のように生きている。自己主張とか存在感とか友情とかいったものと無縁に生きていて特に苦にならないという子が、確かにいる。声かけとか、肩たたき、まして説教などは、ほとんどなんの意味も持たぬだろう。むしろそれは、柔らかな、硬い暴力でしかない。それでもやっぱりなんとか……、生徒のために……という何とかしようとする善意が暴力なのだ。いろいろあって、魚の

ように歩く子の自己格闘は、いかに不思議に見えようが彼の把んだ当面の生のありようなのだ。
それでも、今日、声かけという暴力を行使した。「寒いなあ」「ふん」　ふんか、いいなあと思うのだ。が結界を知らぬ下手な釣りはやはり慎しむべきなのだ。（九四・十一）

迷路の中の鱒

「闘い」という名で、いくぶん安直に括られた私たちの仕事が、ギクシャクし始めた頃、ある先輩教師から、今は絶版の詩集だといって、一束のコピーをもらったことがある。それは「竹の思想」（伊藤桂一）という名の詩集で、ほぼ一〇〇頁もあるコピーの束だ。引っ越しのたびに視野から消え、忘れた頃に突如現れる。私の管理能力とは関わりなく、その束は私の机の周辺（といってもガラクタの山だが）のどこかに必ず潜んでいるらしかった。
コピーの主がそこから好んで引いた詩行が、一様に消耗戦の淵に佇つ私たちをふっと落ち着かせてくれるのだった。〈…山匪ら故國にありて故國をもたず／さればかかる美しき晴夜を／寂しき鬼のごとくいかりて／續々と荒れたる山を降り来れるなり…〉おそらく、その時私は「組織」というものの「迷路」に足を踏み入れていて、何が本当に必要なのか、誰が友なのかを考えるゆとりを失っていた。そんなとき、何者にも帰属しない、好かれたいばかりの安住の場をもとめない、集団で群れない、体制に同調しない、いささかせつなすぎるが故の、この〈山匪〉らの精神の自由こそが開かれた思想の可能性、涸れた批判的エネルギーの源泉を暗示しているやに思えたのだ。一片の詩句が、現実の組織にとって何の意味もないというのは、その通りだと思うが、組織の迷路で踏み迷うものにそれが、いかにさびしく見えることばだろうが、くっきりとした出発への支えとして作用することもまたほんとのことなのだ。

この凄惨にして静かな一行に久し振りに触れたあと、私は厚紙の表紙の折れていたのを新しいのにとりかえることにした。コピーの角を揃えるために頁をくっていた時、「鱒」と言う活字が目の中を通り過ぎた。あわててそれを追っかけると、そこには「鱒」の独白があり、それは次のようなものだった。〈…私は昔は大きな魚でしたが長い旅のあいだに、旅がし易いようにだんだん小さくなったのです。〉そのまま川のみなもとまでゆくと〈私は一滴の雫になってしまうでしょう〉。私はまたもやこの一匹の「鱒」に救けられることになりそうな予感がする。あの〈鬼〉に救出されたように。（九五・七）

きつつきの午睡

昨夜から眠っていなかったので、到着したとたんについ寝込んでしまい、覚めてみると、友人たちは出かけてしまったあとだった。周囲の山腹は、ほとんど杉や檜の植林地帯だが、この日目指してやってきたのは広葉樹林のど真ん中である。渓流とはいっても、沢の音が聞こえるばかりで、水が見えない。雑木の繁りに覆われた緑の地下水道を釣り下がるのだから、大変だ。それぞれに年季の入った釣り師たちだから、そこは上手にくぐり抜けながら竿を出していることだろう。

とにかく、彼らの帰りを待つことにした。こういう日に限って、美しくてでかい岩魚がくるんだ、きっと。……口惜しければ、自分も竿をもてばいいのだが、妙にめんどうなのだ。「困ったもんだ」と口に出してみる。沢の音と、野鳥たちの声以外、何の音もない。遠くでブナの木が光っている。また眠くなる。

とつぜん乾いた木の転がるような、激しい音がした。ぎくりとして、見上げた頭上の、枯れた老木の上にきつつきが見えた。きつつきの音で、不覚にも遠い日の何回目かの失恋を思い出していた。あの時も頭上のきつつきの派手な音に、オレは聞き入っていたのだ。ひたすら歩くうちに迷い込んだ谷

川が崖崩れのため封鎖されていて、そこに鉄条網があった。こじあけようとして左の掌を傷つけた。血がにじんだ。その赤い運命線の乱れに心を奪われた。運命を変えよう。私はまじめに、その掌を棘にうちつけた。何回かうちつけているうちに左手は真っ赤になった。その時だ。きつつきが音をたてたのは。あの音から、何年、過ぎたのか。

ここでこうしていると何ひとつ変わりようがないのだと思えてくる。人は青春の延長を生きるしかないのであり、まちがって信じられているように、それほど人も世の中も変わったりしているわけではないのだと思えてくる。《きつつきの仕業だ、これは。》伸びざかりが過ぎると杉や檜だって、いくら按配しようがそれほど伸びるものではないという話をきつつきから聞いた。

あれ、きつつきのやつ、もういない。

向こうから、三人の少年が釣竿もって近づいてくる。（九七・六）

Ⅳ

石を蹴る

二杯目と三杯目のあいだ

「おまえみたいなヤローが、組合をへなちょこにした……えっなんか文句あるか。オレはビンボー人で、オレみたいなものが、教師になった。教師になってわるいか……」

彼のからみは、突如、右横の暗い席からはじまった。この少しトッパだが、実直そうな非組合員の青年教師の言葉をちゃんと聞かねばとは、思っていた。なつかしいからみ方だった。作法に叶っているようにも見えた。

私は彼の横に席を移して、少し静かな話をしてみたかった。ところが席につくなり、私の左耳に向かって怒鳴り声が飛んできた。私は黙って何杯目かの水割りを彼の顔にぶちまけてしまった。からまれ方にも作法があっていい。そのあとは、周囲も入り乱れての西部劇。すんでみると、その長身の非組教師は私の肩を抱いて、「こんなん、初めてや。こんなふうに返されたんは、初めてや」としきりに興奮。私もある種の高揚の中にいたのだが、「オレのぶっかけた水割りは何杯目だったか」などと考えていた。

このところ、同業者と話していると気づくことの一つに、どこの職場にも若い教師を「指導」するという言い方がはびこっているらしい。（私は失格である。エピソードはそれを証明するための材料だ。）いい方は指導だが、むしろ内実は熙使（あごで指図すること）であることに気づかない指導者づらが増えた。あごで使われる方も世慣れたもので面従腹背が日々の生き方になっていく。

組合再編だとか、冷戦以後だとか、いっている間に職場の「非民主化」はこんなふうに完成期を迎えている。権力を背景にものいう者には、右だろうが左だろうが噛みつくことにしていた新米教師時代、そのトッパを先輩たちはムキになって相手にしてくれた。あの、「水割り」は、あれは私に向かってぶっかけられたものだったのだ、Fよ。

それにしても、ぶっかけた水割りが、二杯目だったか、三杯目だったか。二杯目で軽く酔う私には、二年前の話だが未だに深刻な問題なのだ。（九五・九）

旗と「自由」

卒業式での「日の丸」掲揚をめぐって、職員会議が長びくといったことが、近くの学校であったらしい。ひと昔前のことではなく、ごく最近のことだ。例によって掲揚をゴリ押ししようとする管理職と不掲揚が習慣となっているその現場で必要性もなかろうとする一般職員との間で論議が絶えたとき、ふと全体に水を向けて、「……それでは、家で祝祭日に国旗を掲揚している方はどれくらいおられますか？」と司会者が問いかけたらしい。

すると、すかさず校長は手を挙げ「わが家では揚げてます」といったとか。つづいて教頭も手を挙げ、「私のところでは、旗はありますが、棹はありません」　そこで出席していた職員は、いっせいに笑ったとか。それが失笑といったものか哄笑といったものだったのか、なにしろ酒の席で聞いただけの話でよくは分からないが、少なくとも、その席にいた者は爆笑に近い笑いを笑った。「うちには旗なんかない」というほとんどの一般職員は、国旗を立てるのか、校長の顔を立てるのか、さぞかし迷ったことだろう。

日の丸問題を大上段にふりおろすつもりはないが、ただ、この手の「強要」は反対意見を強制的に抹殺してきた歴史の延長上にある。強制的に意見を画一化すること。つまり形だけの「意見一致」を実現させることでしかない。

何年も前の職員会議で「君が代」について異なった意見を述べたあと「決をとりなさい」をくり返しつつ、私も友人のK君も、二対四十といった結果を何度も何度もその四十名のために出させたとい

う経験がある。異見をもつ自由というものが些細なことにのみ限られているなら、それはすべて愚痴としての自由にすぎない。四十名程の同僚を見据えながらK君と私に共通していたものは、ある種の快さであった。「俺たちは自由だ」、なぜなら、自由の本質は現存する制度の核心に触れるような事がらについて異なった意見を持ち得るか否かにかかっているのだから。いかにやわらかな装いをしていようが、強要・強制といわれるもの、その不寛容さの正体をあいまいにするわけにはいかない。

それにしても先の教頭はそのうちどこかで棹を買ったりするのだろうか。（九五・十二）

新「コーヒーの会」再開案

ひとつ。珈琲の会を再開します。こんどこそは、閉じるまでの時間を珈琲の香りで満たさねば看板が倒れます。そこで、珈琲の材料、道具の持ち込み役、煮出しの役目などを輪番制にします。珈琲屋の珈琲は、普通一杯で終わります。すると話もそのあたりから会議じみて来て、本来の会の趣旨からズレていきます。空の珈琲カップを見つめつつの話ほど淋しいものはありません。

ふたつ。「ちいさな」話こそがおいしいということを、常に会のまとめにします。「大きな」話が、今時ほどスベリ、説得力を失った時期はかつてなかったように思うからです。　みっつ。ひとりひとりの個性が形を帯びつつ、しかもそれが他者を排除しないという鉄則を共有します。といってみても、これはなかなかむつかしいものですが、少々の隙間は珈琲でつなぐことができます。大きいのは、おサケの会にでも引き継いで下さい。それでもダメな時は大人なのですから、それなりに……。とにかくも、ひとりひとりの息づかいを感じとれる距離を保ちつづけることです。とはいっても、ベタつくのは最悪です。

よっつ。「教師」であることを、単に否定的な契機としないこと。（例えば教育亡国論者のごとく）

かといって肯定的な契機にする（例えばやたらに増えたセイトノタメと騒ぐ新聖職論者のごとく）のもそれ以上に気持ちの悪いものです。その中間点こそ、両極を常に相対化し得る位置であります。話題の源泉はこの中点に埋まっています。

いつつ。そのために、その両極に向かって、「悪口」（批判というほど上等でもなく、ボヤキというほど卑しくもないという意味で）を放つ練習を重ねましょう。悪口は嫌いだと他人に思わせたい人も、悪口に生きがいを見つけている人も、あらためて、テメエのカイショで、正しい「悪口」をめざしましょう。そのため、悪口に包囲されるのもよしとしましょう。

むっつ。……きりがないから、あとは読者諸氏におまかせします。「神々は細部に宿る」と言ってもいいし、「小さなコトからコツコツと――」というのもいい。小さな会が、大きな会にくらべ、ほっとするのは「歴史的事実」でありますから……。（九六・七）

兵庫県教育委員会主催　「教育課程研究集会」メモ

「こんな蒸し暑い、夏休みのさなかに、こんな所へ来たくなかったが、行けと命じられるから、しかたなしにやって来て、早く終わることばかりを考えておられる……」指導主事某氏は、いかにもその洞察力を誇るかのように会場を見まわした。

ウトウトしながら「オッ、こいつは漱石だ」などと考えていた。もしそうなら話はこう進むはずだ。《あなた方は講演よりも、茶菓子が食いたくなったり酒が飲みたくなったり、氷水が欲しくなったりする。そのほうが内発的なのだから自然の推移で無理のないところなのである》外発的で不自然な「開化」を人の心理になぞらえて弁じた名講演「現代日本の開化」の一節である。

指導主事某氏は、聴衆の「内発的なるもの」を見抜いてはいた。にもかかわらずというか、だからというか、やはりというか、話はそこから一転した。

「そんな方々は一度、本気で現在の教育改革の、真の意味をこの集会で勉強し……」ときた。私はほとんど完璧な睡魔に憑かれていたので、記憶はおぼろだ。「そうすれば眠気など消え…」ともいったような——。話の方向を取り違えたままの某氏は、身を震わせて「集会」の「成功」を連呼しつづけた。「内発的なるもの」を喚起させるためにも声は、熱気を帯びねばならない。教育の場では、どうしてこの手の余裕のなさがのさばるのだろう。漱石なら《この講演がその場合あなたがたの自然に逆らった外発的なものになるから》成功しないということを知っていただろう。ここで笑いを武器にして、一挙に主題の核心へ聴衆を導いたことだろう。

指導主事某氏よ、一度わが「コーヒーの会」にあなたを招待しよう。なにもあなたがたのように強制とか義務で、出席を命じているわけではない。招待をうけるもうけないもあなたの自由だ。「コーヒーの会」で、眠気ざましにコーヒーを口にしながら、〝生きる力、自己実現〟（中教審のまとめ）を論じ合う。その手の話なら私たちにまかせなさい。あなたはそれをゆったりと聞いていればよい。そんなにがんばらなくても良いのだ。とはいっても、たいしたことはないけれどね。よければ、是非いらっしゃい。（九六・九）

ある論争ながれ

ある公の席で、もう四、五年もすると「部落」は、なくなるという発言を聞いた。発言の主が、どのような政治的立場にいるのかは明白であるとしても、そのような発言に対して、無視で応えるのは

得策ではないだろう。そこで私は、「明日からなくなるという意見があるとすれば、あなたは、どう思うのか。」と、念のためにたずねてみた。すると相手は、おもむろに笑いをうかべて、「そんなことはあり得ない」という。「では、四、五年と明日とでは何が違うのか。」というと、突然相手は不機嫌になり「司会！進行！」

私は、けっしてこの手の議論をなめたことはない。丁寧につづけるべきなのだ。「根拠のない発言を、公の場でいいつのるべきではない」と私が発言したあたりでは、件の相手は貝になっていた。そんなに簡単に貝になるなよと思ってももう相手はいない。いるのにいないのだ。中野重治流にいうなら「一種の失恋状況」に陥る。女への思慕の中身を検討しつつ「泥仕合」といわれてもやりとげねばならなかったのに。

「そこに誤りがあり、そのため何かが、人間的な何か、社会的な何か、文学的な何かが被害をうけている、その被害をいくらかでも小さくしたい、くいとめたいというところから筆をとって反駁を書いたと言う場合の方が多い。受けてたつといえば聞こえはいいが、論争での私の態度は、一貫して消極的だった」（論争と私）

差別は、ほとんどなくなった。ゆえに差別はない。ゆえに部落はない。地区指定があるがゆえにあるにすぎない。といった論の展開が論争抜きで形成されているのか。お上品なお話し合いの中で、被害を受けているものとのぞっとするようなつながりのなさこそがまかりとおろうとしているのは確かなようだ。（九七・十一）

「個の声」がリズムとなって……

ひとりの個の持続した声がリズムとなって流れているから、その文章を最後まで読める。そんな文章が、この時期、この機関紙に載るようになって何年か経つ。退職予定の人たちの文章群は、この通信の最良の産物といってもよいだろう。他に例を見ない企画だからというわけではなく、それもあるだろうが、「個の持続した声」の存在を証明しつづけていることの意味は、そのねらい以上に大きな意味をもっているように思われるのだ。

もちろん、情報パックを自負する機関紙もあってよいとは思う。ただ、大新聞でさえそうであるように、記者クラブ発表、あるいは県教委発表を一歩も出ない情報活動ならしない方がましである。斜め読みにしてさえ、大した情報ひとつない紙面というものは「死相」に近い。　この機関紙が「個の持続した声」に執着することで、あるいはそういった方向性を持つことで得る情報は、まだまだ死ぬことはないだろう。まだいけるのだ。

今年もまた、橋本さんの文を得た。熟読されたし。いまひとり、退職予定者の中に文章が何よりも嫌いだという河島完治さん（いなみ野養護学校）がいる。古いつきあいだが、ほとんど何を話したか憶えていない。いや、話はしなかったが、古いつきあいなのだ、という方が落ちつく。

送辞ではないが、話をひとつ紹介して、この無口でまっすぐな、教師であり、活動家だった人の「個の声」としたい。

私が保育園から娘を受け取り、その足で執行委員会に出ている河島会計にたまっていた組合費の何カ月分かを払い込みに行くということがあった。河島さんは、三歳の娘の目の前で優しい目になったあと、両手にぶら提げた大型紙袋から会計事務に必要な台帳、領収書、印鑑、スタンプ、算盤、金庫（？）などの七つ道具を喫茶店の卓上に並べ、ゆっくりなめるように記帳し、くどいほど確認を重ね

て、道具をしまった。いつも持ち歩いているという。フロッピー一枚で済むこの時代の中を——。
帰りの車の中で、私はなんだか、あたたかななつかしさで、ニタニタしていたと思う。（九九・二）

「日の丸・君が代」は誰の「命令」か

大日本帝国憲法の第三条「天皇ハ神聖ニシテ侵スヘカラス」が、あの皇軍を支えた法的根拠であるとし、「最上級者天皇には、下級者だけが存在して、上級者は全然存在しないから、その責任は、必ず常に完全無際限に阻却せられている。この頭首天皇は、絶対無責任である」と見抜いた上で「上官の命令は陛下の命令」という常套句をつなげば、全軍隊の秩序構造を支える巨大な二本の柱、つまり、「上級者への絶対服従」と「上級者の絶対無責任」とが明らかになってくる。

「圧倒的な否定的現実に抗して、あちらこちらのどこかの片隅で、それぞれに一つの微塵、一つの個、一つの主体が、その自立と存続のための、傍目にも我が目にさえも無意味のような無価値のような徒労のような格闘を持続することに耐えつづけよう」と決意する主人公藤堂二等兵の、上官との痛快なやりとりが頭の隅っこにあったことは確かだ。皇軍への根源的な批判を主題とする小説「神聖喜劇」（大西巨人著）が私たちの眼に触れはじめた一九八〇年代のはじめのころだ。

すでに掲げられ、歌われていた「日の丸・君が代」を問う動議を職員会議にかけたことがある。入学式に持ち出すのか、卒業式に持ち出すのか、日の丸だけか、君が代だけか、君が代は歌わねばならぬのか、歌う歌わぬは自由かどうか、その日の議長にその都度、採決するように意見を述べ、挙手してもらった。ただ一人、K君だけが援軍だった。論戦は二人で充分もちこたえられたが、採決はことごとく2対その他、保留少々で圧倒的な敗北だった。分かってはいたがやはり疲れた。疲れて入った

トイレで「子どもじみた論争ですから……」と声をかけてきたのは、高教組東播支部長で、現、どこかの校長、「では賛成なのか」と聞くと、「保留」といってニヤリとした。会議がすんで、再びトイレに立つと、退職前の数学教師が「わしらが、アレを問題にせなあかんのやけどな……」とその労をねぎらってくれる。なんでトイレで、そういうねんと怒鳴ったわけではないが、その言葉を無視して小便をしていた。最後の動議「歌う歌わないは、個人の自由かどうか」だけは、なぜか採決に勝った。相手も疲れたのだろう。

それはそうと「日の丸・君が代」は、誰の「命令」なのだ。（九九・四）

石を蹴る

ついこの間のことだ。何かの会議があり、たぶんあれは青少年愛護センターあたりの「月間報告」だったと思うのだが、その中のひとつに「Y地区で小学生が石を蹴りながら下校。小学生のマナーの改善。」とあり、なんだこりゃという気分になった。会議の間中その一行から目が離せなくなった。どのような蹴り方をしていたかは知らぬが、小学生の足だ、大して破壊力とてないだろうに。ここまでくると、その少年もしくは少女のためにも石蹴りを復権せねばならない。確か何かの本に石蹴りの方法が書いてあったという、かすかな記憶があった。帰って一時間ほど雑本の山を探してみると、みつかるものだ。

かすかな記憶と、ひまな執着によるそれなりの成果を、ここに書き写すのはいささか気がひけもするが――。

石蹴り いしけり 児童遊戯の一種。地面の上に適宜のしきりを描いて、数区画を設け、なるべく平の石を、定めの一区画内に投げ入れ、それから片足飛びで跳ねながら、目的の線外へ小石を蹴って入れ、順次、全区画を終わる。早く

上がったものを勝ちとする遊戯で、明治の初め頃、西洋から移入した。（「風俗辞典」東京堂）

「西洋から移入した」ってか？大いに疑問は残る。ここにある図以外の遊び方があったようにも思うが、もし、目の前を石を蹴りつつ帰る孤独な少年もしくは少女をみつけたならその時の役に立てていただきたい。もっとも、ひとりで石を蹴って通る哲学的な子どもなどめったにいない。しかも、少年もしくは少女に妙な「接近」をすると変態呼ばわりされる時代だ。くれぐれも用心して頂きたい。先の報告をした補導員は、私の目には千載一遇のチャンスを逸したかにみえる。マナーを改善すべきだと主張するにいたっては、いう言葉もない。

教師に成り立ての頃だったか。どこかの橋を、友人たちと夜風に吹かれて渡っているときだ。目の前をこれもまた酔っ払いの中年が歩いていた。突然、彼が缶を蹴った。缶は右端から左端まで飛んで川に落ちた。「ナイスシュート」「かっこいい」、友人たちは彼への賞賛を惜しまなかった。そのせつない缶の残像はいまだに残っている。件の男は、しきりに頭を掻いていた。（九九・七）

強配二十年目

やはり、Tさんは退職してしまった。あと五・六年は猶予があったはずだ。

私が神戸から加古川へ飛ばされてきたのは、一九七九年の春だ。顔見知りのTさんはその翌年同じように神戸から加古川へ飛んできた。ほとんど、あいさつらしい言葉も吐かないまま、職員室の私の近くに座っていた。無理やり誘った食事の席で、「……やはり強配で……」と聞くと、暗くうなずき「はい。……でも提訴はしていません。」とつけ加え、念を押すように「……でも強配です……無茶

苦茶です。」あれから、もう二十年過ぎた。

彼と飲んだのは、それ一回きりだった。五年ほどして、授業中に胸を押さえて倒れてからは、入退院を繰り返すことになった。十年ほどそんな状態だったが五年前から休職状態に入っていた。ある日、何かの手続きにやってきた夫人に聞くと、「どうしても学校へ行けないというのです。行くという前の日は、必ず眠れなくなり、心臓が……」という。本人は「心身症」という医師の見立てを頑として受け入れず、医学書ばかりを読みふけっていたという。　生徒たちや、同僚の評価は散々だったが、私は、管理職が下す評価には必ず反論することにしていた。「好きで来たんじゃないよ。文句があるなら、元の学校に戻せばいい。」

人事委員会へ提訴したかどうかなどどうでもよかった。「強配」で来たという人は何年も続いたし、今も続いている。一九七〇年代の終盤に、私たちは、はじめて（といっていいだろう）「弾圧」が、じつは、一人一人の生活への直撃であるということを知り始めていた。無論、勤評闘争を闘った世代は別だ。勤評闘争は、しかし、まだ続いている。県教委の「計画交流」なるものが、各現場管理職による「勤務評定」によって続行されている限り、あの闘いは連続しているのだ。そして、何人もの声を失ったTさんがあふれている。よくいわれるように「勤評」「強配」は死語になったのではない。権力が、それらを駆使して日常を支配する過程で、語られることがなくなったというべきだろう。死語ではなく、タブーとして封じることで彼らの目論見は完成しつつあるのだ。そこで、あの活きのいい一九七〇年代のようにはいかぬが、せめて、丸谷才一風に「裏声で叫べ強配阻止」（九九・九）

頭痛待ち？——市芦勝訴の日に

「頭痛持ち」といういい方は好きではない。が、私は「頭痛持ち」だ。三十年も前の交通事故の後遺症である。遅い「会議」のあと深夜の凍結した峠道で居眠り運転をして、右前輪が側溝に脱落し、左前輪が、右側の山側斜面に乗り上げ、ひねられるように車体が一回転してしまったのだった。むろんすべて後になって人が教えてくれた事情であり、当の本人は眠っていただけである。頭を何かに打ちつけているさなかに目が覚めたのだが、その打ちつけているものが、車の床であることがすぐには理解できなかった。自動車の屋根部分は完全にひしゃげ、フロントガラスが吹っ飛び、見た目は大事故なのだが、大したことはなかった。退院後、「それでも、頭痛は残る」といった医者のことばが、その後何回か、頭痛と共によみがえるときがあった。

市立芦屋高校で、前例のない異常な「強制配転」があり、抗議の座り込みに参加したときの頭痛を憶えている。配転されたSさんが好きだという「中島みゆき」を、出はじめたばかりのCDプレーヤーを持っていたIさんにたのんで、携帯マイクを使って流した。

♪ファイト　たたかう君のうたを
　たたかわない奴らが笑うだろう
　ファイト　つめたい　水の中を
　ふるえながらのぼっていけ

桜が舞っていた。コツコツとドアを叩くリズムで、頭が疼いた。

この九月三十日、市芦勝訴の「判決」を聞きながら、桜と、「中島みゆき」と、あの日の頭痛のこ

とを思った。十三年も時が過ぎたのだ—ある無念さだけが胸を占めてくる。

頭痛は想い出すものではなく、その時々を「疼く」ものだ。だから頭痛を待っているというのも妙ないい方だがそれはまだやってこない。（九九・十）

V

帰郷者たち

紹介「渡辺荘の宇宙人 ――指点字で交信する日々――」（素朴社）

……「お前、盲ろう（二重障害）になって苦労も多いだろうけど、いいこともあるよな」「何やそれは？」「だっていつも女の子にさわれるし、どんな美人の手を握っても怪しまれないだろう」何だかこれは変な言いがかりである。ちゃんと筋道たてて説明せねばならない。「あのな、よく考えてくれよ。毎日さわっていたら、たとえ若い女の手だって何とも思わなくなるよ。言わば手をさわるのが商売だからね。たとえていえば、風呂屋の番台にすわって、毎日毎日、女湯をのぞいているようなもんだ。……」「何、女湯？　やっぱりいい目をしているじゃないか」どうやら誤解がますます深まったようである。それにしてもこの連中はもう一つ大事なことを忘れている。私が指点字（注）などで言葉を交わすのは女性ばかりではないということだ。実際、男性の通訳者や友人の方が多いぐらいなのだ。電車の中で男二人が手を重ね合わせて話してるのを見たら、世間の人がどんなふうにおもうだろうか…

一冊の本が、県立盲学校の石川さんから贈られてきた。著者の福島智君は彼の教え子である。小四で県盲に編入してきて以来のつきあいだ。本には石川さんの添え書きがはさまれている。

――彼の聴力が下がり、ほとんど聴こえなくなって、帰省していた高二のある日、私の自宅に一泊しました。今でもはっきり覚えていますが、この時、彼は震える声で「ぼく、男版のヘレンケラーになりそうや」と不安をうち明けてくれました。私には見えませんが、彼はこの時涙を流していたように思います。これに対して私は、返す言葉がありませんでした。――

という場面から、この本の透明なユーモアに至るまで、福島君に何があったのかは、私の想像を超

えている。しかし、この本にはじめて接した時、石川さんの見えない眼に涙があふれたに違いない、というのは、私の想像の内である。

（注）指点字とは、相手の指をタイプライタに見立てて触れることによるコミュニケーション法である。

（九六・三）

記号の中の〈八重桜〉

――紹介・詩集「夜の人工の木」豊原清明（青土社）

青雲高校（通信制）生の豊原清明君が、第一回中原中也賞を受賞したことは、新聞で知っていた。K書店をぶらついていて、その詩集にふつかった。これは買えという意味だと思い込むのが、そんな時の私の「詩集」（高価！）の買い方だ。彼にはエンもユカリもない。　新聞紹介の詩「初しぐれ」が、豊原君の第一印象だった。

僕には本なんかいらない／金も／地位も／学歴も／ただ　夜になったら／
泣いているだけの／　八重桜

「泣いているだけの　八重桜」が心にひっかかっていた。青雲高校へ行くからには、彼にそれなりの散文的な理由があるのは分かりきっている。詩集の帯に「不登校や家庭内暴力など、心の病を内に秘めながら……」とある。こんな記号で紹介される少年のいらだちを想った。

「不登校」「家庭内暴力」「こころの病」に限らず、これらの業界用語がまことしやかに取引される現場から離れて生み出された詩に、こんなふうにまたぞろ記号で対応してはならないだろう。それ

にしてもこれらの記号群が学校、あるいは学校化社会を覆いつくしてどれくらい経ったのか。（事実は記号の中に埋もれるばかりだ。）

こんなになる少し前、その時々に触れたたったひとつの「事実」を守るために、押し寄せる記号群とやり合った憶えはないだろうか。記号は常に「事実」の外で作られ、「事実」の表皮にへばりついてきた。剥がしても剥がしてもそれは、ぶ厚い層となった。

そんな牢獄の中では、やはり詩が欲しくなる。とびきりの言葉が欲しくなる。私にもそんな閉ざされた記憶がないこともない。だから〈低い声〉で挨拶ひとつ。「トヨハラ君、人生は詩だ、きっと。あるいはその一行に及ばないという人だっているのだから、詩こそすべてだ。」（九六・六）

紹介「突破者」（宮崎　学著・南風社）

「俠」なるものをめぐって

水俣の漁師が、交渉や抗議のため、「チッソ」や「厚生省」に出向く。ところが会社の上層部と向き合っても、何人の官僚と向き合っても、「チッソ」「厚生省」が見えてこない。どこにも「チッソ」や「厚生省」がいないんですよ……といった証言映像を年末に観た。水俣を撮りつづけた映像記録作家土本典昭と、映画「ショアー」のランズマン監督との対話を軸にした番組だったが、その場面の静けさが胸に沁みた。

年が明けてアクの強い一冊の本にぶつかった。その中に「……役人や官僚は個としての貌をもたない。市民と相対しているのは具体的な顔をもった個人ではなく、個性を抽象化した『公』である。そして、個の顔をもたない者には自己責任はない。しかし現実には、個の顔も責任ももたない膨大な数の官が日本の実質を握っている……」（「突破者」宮崎　学著」

水俣病訴訟の原告団の一人である漁師の言葉と名門ヤクザのボンとして育ち、学生運動家となった以後も常に権力に刃向かいつづけたという自らを「突破者」と呼ぶ男との現状認識の一致は、決して偶然ではない。これらの少数者には素顔と実名をさらけ出すことが自らの生き方となってくる。しかも、「切所に立った際に、難儀なほうへ、損なほうへ賽子を振る。」「損得勘定抜きに他者に抵抗することは、損得抜きに他者のために尽くすこと」「要するにアホになる」ことがそのモラルとなってくる。まだ滅びない「侠」と呼べるもの。

私はかって「かなわぬまでも闘い抜け」と言った人のことを想い出し、つづいて、身内、財産を失った被災者すべてのために、オレがやらねば……、とおそらく生涯、たったひとつの闘いを闘う、避難所のテントを張りつづけるTさんのことを考えていた。噂に拠れば、彼は「ボランティアはもういい」といっているらしい。「愛される少数派」はもういい、愛されんがための嘘や方便を放り出してすっきりと行政と渡り合っているという。

連想は、正月の酒量とともにさらに増幅され、年の暮れに招かれた三十年ぶりの「同窓会」で、もう五十歳になるかつての教え子の「あの時、会社の仕事を放ってまる二日無断欠勤のまま物資を運びつづけ、上司と大喧嘩をした」という話にまで伸びた。酒気は抜けたが、「突破者」が喚起する「侠」なるものの連想の環からしばらく抜け出せそうにない。（九七・一）

気になる親父たちへ、映画ひとつ

……カメラは回りつづけている。私はカメラを回しつづけている。それが唯一のメッセージであったとしても、それはそれで構わない。

「学校のことだけどさ、何が一番いやだったの。行きたくないって。」「えーっ」「朝か。朝起きるのがつらい、

とか一「いや、学校という存在自体、面倒臭い」
彼の存在自体面倒くさい、という表現にまた、私は十五の夏にワープしてしまう。学校という存在自体否定したかった十五の夏に。
……思えば、二八年前、私を旅していた十五という年は、今息子を旅している。行きかう年もまた旅人なのである……このとき、この作品のタイトルを「百代の過客」にしようと思った……」

原将人という映画作家が、離婚によって、別々に暮らしていた息子とある年の夏、一カ月の間、両方がカメラを回しつづけながら、バンに乗って、芭蕉の「奥の細道」を辿る旅をする。映画は九時間二十六分になる超長大作品となった。右のちょっとした引用は、その制作日録「父と子の長い旅」からのものである。むろん、私はそんなマニアックな映像を見られる環境に今いないのだが、この映画、気になる。ある雑誌のなかで、最も今日的な父子関係の刺激的な暗示があるなどと、山口昌男氏が宣伝している。それにつられていうわけでなく、いつか私の周辺にいる〝気になる親父〟たちと連れ立って、この九時間二十六分の映画を見たいものだ。もちろん、その〝気になる親父〟のなかには、他人になんといわれようが、地蔵の写真ばかり撮りつづけているTさんや、「片側モヒカン」の息子を持つAさん、息子が独立したので、一人で山登りばかりしているUさんなどがいて、そこはかとした円陣を組んでいる。
そして、思うのだ。そんな風にして、親父たちは健在なのだと——。（九七・十）

一九九七年　年末所感

―いまだから「帰郷者たちの闘いの記録」を

×月×日朝、出勤すると、全職員の机の上にリンゴがあった。打ち合わせでこれは四年学年団全員で出し合い買ってきたものであるという。数日間机のリンゴはそのままであった。一人の分会員が旅行団の教師に聞くと「校長のポケットマネーで買ったのや。校長がワシが買うたものやというと、食うてくれへんやつがおるから、旅行団一同で買うたことにしとけやということやで」と白状した。修学旅行は終わったが、いまなお分会員の机のリンゴはますます赤みを帯び、かすかな香りを放ちつつある。校長は、先日もある分会員に「何で食わへんねん」といい、おべっか使いのM女教師は一分会員に対しナイフを用意してまで「リンゴむいたろか」といって、食わせようとしてきた。

なぜかこの小さなコラムを、よく覚えている。一つの「分会ニュース」の埋め草なのだろうが旅行団の教師の白状、ナイフのおべっか女教師の通俗などとともに、香りを放つリンゴのリアリティが、わたしをとらえたのはもう二十年も前のことだ。

ふともらした若い分会員の言葉が、こんなふうに記事になるのは、むろん闘いの日々があってのことだ。どこにでもある話だが、どこの現場からも「報告」されることのない種類の話といってもいいだろう。そうなる理由は、はっきりしている。ペンを持つくらいなら、ナイフを持つほうが「安楽」だからだ。ペンからナイフへ持ち替えることを、「時代の変化」だといいはる手合いが増えた。批判と論争を回避しつつ、黙ってリンゴをむいているやつがいるそうだ。私は、若いのでよく知らないのだが（本当に）、こういう空気をかつて「翼賛体制」といったのではないか。あるテレビを見ていて、そんな言葉が思い出された。

詩人の石垣りんさんが、いままったく詩が書けない、書かない、書かなくともとくに誰も困るわけではないのですが、といったあと「時代が戦争に傾いていくころ、誰もなにも書かなくなったが、いまは、あのころによく似ている、というか、あのころよりももっと巨大ななにかが、押し寄せてきているような、そんな気がしてならないのです」

この、大口をたたかぬことを自戒としている老詩人の「予言」は、のんびり大好きなスルメを齧りながら、焼酎を飲んでいた私の耳を引っ張った。私が、雑然とした書棚から抜き出したのは、あの、「帰郷者たちの闘いの記録」（畝本処分・青雲闘争）だった。これはあの書かなくなった石垣りんさんに、はからずも誘われたといってもいい。

それでも時代は変わったのだ、といいたがるひとへ、いま、私は、心をこめて、このすぐれた一級資料をおすすめする。冒頭の証言は、その中で埋もれるようにして、私がページを開くのを待っていたのだと、その夜は思い込むことにした。ここにある、闘いの記録、内と外の「敵」の相貌、通知・通達という名の弾圧、裁判闘争の記録、生徒の証言、実践、思想などにリンゴをむく手を休めてふれて見るとわかるはずだ。私たちの近くで組織されていたこの最後の「闘争」以後、「変わった」の大合唱が始まっているということが。「変わらぬこと」が見えぬものに、「変わったもの」もまた見えぬが。変わったというよりひとつの「迂遠な闘い」の渦中にいるということが。（九七・十二）

VI

だからにもかかわらず

「だからにもかかわらず」

Rくんから電話があって笑ってしまいましたよと、その友人はいうのだ。Rくんとは、この春、いろいろな妨害をかわしながら、定時制高校に入学した車椅子に乗る障害者だ。

ある日の学校の中でのこと。とつぜんKがRの襟首をつかんで、「オマエ、まえから気に喰わんのじゃ」というなり殴りかかってきた。少しそり気味に車椅子の背にもたれるRの頬を、はじめのはかすめたが、何発かは「当たったようだ」という。あわててナゼ殴るのか、オレはオマエに恨みはないのに何故なのかといったことを尋ねたようだ。メンチ切ったやろ、切ってないといったやりとりのなかで、的を外した相手の拳を、Rはすかさず噛んだ。全力で噛んだというRの顎の線が想い浮かぶ。

友人は、そこまでひといきに話したあと、少し間を置き、「それで必死になって逃げた」とつけ加えた。私はとっさにその場が想像できず、混乱していた。車椅子は、逃走用には出来ていない。もちろん攻撃用にも。

「エッ？　どっちがや、まさか――」

「そのまさかですよ」「エッ？Rか」

「違いますよ、相手がですよ」　友人が笑い、私にも、やはり笑いがこみ上がった。

が、障害者「にもかかわらず」逃げなかった、あるいは逃げられなかった、という私の中の「にもかかわらず」が、私の笑いをくすんだものにした。障害者「だから」逃げなかった（逃げられなかった、ではない）のだ。

それにしても車椅子のRに殴りかかるひとりの定時制生徒の、暗くて、孤独な決意を思うと、私の笑いも、おそらく友人の笑いもそのまま凍るしかない。この決意は、定時制生徒「にもかかわらず」なのか、定時制生徒「だから」なのか。またしても「だからにもかかわらず」だ。　私の、このやっ

かいな接続詞めは私の文章をさらにまたワカランものにこね上げるだろう。（九四・十二）

スイスのネクタイ——K子へ

どういうなりゆきか、卒業生のK子がスイスの田舎から大男を連れてきて結婚式を挙げるというので、お気に入りの派手目のネクタイをつけて参列した。式のあとの、友人たちのパーテイに招かれ飲んでいるうちに、私のネクタイは緩み、もちろん口も緩んで、「あのペーター（アルプスの少女ハイジの親友である羊飼いの少年）のネクタイ、田舎くさいな。」というと、すかさずK子は「ネクタイなんか一本も持ってないもん。スイスの空港の店で買ってん。センセのなかなかやね」というので、「持ってくか？」と外しにかかると、ペーターのネクタイを、ハイジK子は、いそいそと外して、「交換や」といってさし出した。「ところで、このネクタイ、車椅子の障害を持った高校生の小便介助をしてた時、失敗してその子の洗礼を受けた想い出の品やけど、いいか？」と念を押すと、「それはめでたい。あの人にはわからんから頂戴」といって受け取り、クンクンと鼻にあて、ニッコリ笑った。

障害者Rと、元ツッパリのK子は何の関係もない。おそらく、何のつながりもないまま二人の人生は、それぞれに過ぎるだろう。ただ、RとK子をほのかな香りで仲立ちし、スイスの片田舎の壁かなにかに、さりげなくひっかかっているであろう、ネクタイのことを想ってみる。その横で牛乳にまみれたままK子がチーズか何かを練っている。

K子よ、俺もそのネクタイのようなもんだ。きみもRも小便くさいネクタイだなどというと、もう少し上等だと返されそうだが、おれは独りでそんなことを考えている。というのも、こんなに衛生的

で、管理的で、異物を汚物として排除することしか考えない不寛容な時代の中では、そうあるしかないからだ。そんな時代に、生の匂いを生身につけて、ヒンシュクを買いながら、ありったけのボロクズに正当な権利を与えてみたくはならないか。K子よ、ネクタイともども、すこやかに――。（九五・十）

またまた「校門にて」

ひっきりなしに車の行き交う国道に沿って、B小学校は建てられている。当然、校門に直結するようにして陸橋はつけられている。子供たちは、ごくあたりまえのこととしてそこを通って登下校している。「てんかん症」のTくんもそこを通って「自力通学」をしている。常に危険に見舞われるとしても、あたりまえに「自力通学」させるという母親が、それでも、その陸橋だけは心配でものかげから気づかれないよう看つづけるという日が続いている。特に下校時間が不定なため、帰りの陸橋だけは教師の介添えが必要となってくる。入学後は、担任が手伝ってくれた。「お母さんがウロチョロすると、この子は自立できない」と叱られたりもしたという。安心したわけではないが、助かったし、教えられもしたという。その担任が遠くへ転勤になった。転勤になったが母親は安心して帰ってくる息子を待っていた。ところが学校から電話があり、出かけると、新しい担任と新しい管理職が待っていた。そこでいわれたことばが、「我々の仕事は校門までです。陸橋はお母さんが介添えすること。」であった。

思えば私のこの連載コラムは「校門にて」から始まったのだが、またもや、そこにもどってきたようだ。校門周辺を徘徊するばかりのこの癖が、私という教師をいよいよ半端な方へ導く。

十七年前、現任校へ辞令を受けに来たとき、そこをくぐりたくなくて、校門前を何度も往復して以来、「校門」を抜けては遅刻し、そこを抜けては早退する日が続いた。むしろ誤解を承知でいうなら、「校門」の外でこそ、仕事、それもとび切りいい仕事ができなければ、私という教師はダメになるという思い込みが支えだった。たいした仕事もできぬまま、年齢ばかりとったし、思い込みの張りも薄れるばかりだが、たまたま聞いたこの母親の話は、コトが「校門」だけに通り過ぎるわけにはいかない。「校門」から外であればこそ、聞いてしまった話なのだから。（九六・五）

「女性」から「順華」へ

宝塚の障害者作業所で働いている金順華（スナ）（定時制高校一年在学）が、仕事仲間の大谷喜久（定時制高校出身）らと、野菜を売りに行った先の養護学校（大谷の母校でもある）で、某教諭に殴られるというどうにもやり切れない事件が起こった。

十月二十二日の朝日新聞朝刊の、その記事を最初に見つけたのは妻だった。「コレ、スナちゃんのことやないやろか？」といわれてのぞいた記事に「……作業所に通う知的障害のある女性が（一六）が、男性教諭に殴られていたことがわかった……」とある。順華は、妻も私もよく知る女の子だ。が、記事の文脈のなかで、順華は「女性」という主語を冠せられている。一六歳は少女だと思うのだが。

新聞記事における主語の使用法をここで問うている訳ではないが、あの順華ちゃんが「女性」で記事になるせつなさのようなものが、その時わたしをとらえたのだろう。「男性教諭」と、匿名になる事情は分からぬではないが、記事を読み終えた印象――「透明人間」が仕事の合い間に「やすみ」をとっている順華の頭を殴打した。殴打されて順華は、「女性」になった。そんなイメージを口にすると、妻はあきれて、「順華ちゃんは、作業所の仕事で野菜売りを手伝っている定時制高校生、金順華と言

う名の一六歳の少女です。」と「女性」を正しく定義しなおした。そして、その固有の生を担った主語が記事になることは滅多にない。妻にも私にもそんな怒りが、せつなさの根に絡んでくるのだ。

カナダの極北の雪原に生きるイヌイットの生活を記録した文に次のような一節がある。

……五秒間であれ、五分間であれ、前の人が再び進みはじめるまで、じっと待ってあげます。なぜなら、こうして、一瞬立ち止まっている人は、「休んでいる」からなのです。「休んでいる」人は彼自身の守護霊と交信しているのです。そして、守護霊の声、つまり彼自身の「内なる声」のようなものに耳をすましているのです。これは神聖な瞬間なのですから、その人の心の静寂に他の人がわりこんだりすることはできないのです。（中略）いっしょの「はたらい」たり、「あそん」だりしている人たちが、「やすみ」の時間をいっせいにとることはありません。一人ひとりが、マイペースで「やすみ」をとるのです。……

――「子どもの文化人類学」原ひろ子著（晶文社）

その時、順華は、「内なる声」を聞いていた。この男はその静寂と瞬間を台なしにしたのだ。

市教委・校長らは、「叩かれたことに敏感な子がおり、個別の事例について現段階では何ともいえない」と、順華や養護学校でこの男に叩かれた他の子どもたちの主語を、またしても障害を理由に消しにかかる。消した上で《「指導の範囲内」で、軽く叩いただけ。この男は、自分たちの「管理範囲内」であたりまえのことをしただけ。したがってわれわれに管理責任はない》というのだ。いつものように――。

わが主語を奪い返すこと。それをわたしたちは闘いと呼びならわし、さらに、透明化する相手が形をあらわすまで、手を抜くことはなかった。この闘いもまた、――。（九六・十一）

「口で起こした暴動」の記録

この春卒業した草津良の、「支える会ニュース」が、ささやかな本となった。歯ブラシを咥えて、その柄の部分でワープロのキーを押す。そうやって四年間、書き継がれた手記は、彼自身の表現によれば「口で起こした暴動」なのだ。一二〇名入学、四〇名卒業が、この県下で最初の単位制夜間定時制高校の決算であったが、人と人のつながりを切ってくるこのシステムの中で、第一回卒業生草津良の抵抗ははじめからおわりまで、痛快でかなしい「連れ」をとりもどすためのたたかいであった。

新しいクラスになった。（中略）回りは知らん人ばっかりで、ここはほんまに学校かなと思ったけど去年の国語の先生見て、「あ、やっぱりここは北校やな」って思った。

知っている子が誰もいなかったってことは、その時わからなかったけど今考えると、先生の戦法かなって思った。初めは、授業もへったくれもなくて連れをさがしたけど見つからなかった。けど、一年の時殴られた子の顔だけはちゃんと覚えていて、ゲーッこいつぼくのクラスと同じかー？と思って背中がゾクゾクってした。

なんで殴られたかっていうと、昨年の一学期にそのF君がぼくのクラスの子に手だしよったから「手出すな」って言ったら、いきなりボコッとげんこつでやられて「おまえ、覚えとけ」って言ってどっかへいってしまった。

次の日、あーやっぱりこいつと一緒か、あーけったくそ悪いって思ったけど、席は隣やった。その反対には誰もおらんというひさんな状態で、やばいと思っていたら、先生に書類書けって言われたから「あーきたか、最悪」。書類を配り始めた。

Fは必死になって書類を書いていて、もうなるようになれっておもって、「Fくん、ごめんやけどこの書類書いてくれへん？」って明るくびびっているけど、言った。そしたらこっちむいて、「おまえ草津やろ」って

いうから、ぼくは「はい」って言った。そしたら、「おまえのうわさは、友だちから聞いてるぞ、校長や先生にいろいろ文句いっとるらしいやんけ」って言った。ぼくはもうこれでこっちのもんやって思って「そうなんや」って言ったら書類に手出して、書いてくれた。今はいつもFと二人で授業中、しゃべっている。（二年生一学期）

（九八・九）

ある機関紙から

ちょっとした縁で、ある福祉作業所から機関紙が送られてくる。B4判、手書きによる両面印刷。施設長さんの静かな人柄がそのまま紙面の論調となっているような小さな機関紙である。大上段の批判、提言といった類いの暑苦しさはどこにもない。ようするに、たんたんとしている。ところが、最新号の主張は違っていた。「……最重度の我が子のケアに在宅で疲れている家族がある……」「親亡き後の不安は何一つ解消しているわけではない……」、福祉環境は十五年前と変わっていないのに「福祉観念」ばかりが先走りし、見捨てられた障害者が「増えている」。「言いようのないいらだち」を覚える、といった論調だ。立派なゴタクを並べても、ほったらかしの障害者が、かえって増えている。そのゴタクの中には、厚生省が検討している「社会福祉基礎構造改革」＝改正「社会福祉事業法」（注・本号次頁を参照）なるものもあるという。

わが業界と、そっくり同じことが「福祉」で起こっているといっていいだろう。文部省による「教育改革」が、定通統廃合にみられるごとく、大量の「棄民」を生み出しているという事情を、ここで繰り返すまでもない。

誤解を無視して言い切るなら、「改革」とは常に「改悪」であった。かつてそのことを、最も静かな低みで見抜いたものの中に障害者や定通生徒たちがいた。たんたんとした日常の事実のつみかさね

があるから、能書きは能書きにしかすぎなかった。
高校再編でどれほどの生徒が、こぼれていくのか。
新社会福祉事業法によってどれほどの障害者や、その親が放置されるのか。「親亡き後の重度障害者」をどのように新制度は救いとれるのか。
「改革」といわれる時代が、ほんとうにそうならば、それら、低みからの問いに答えが出たときだろう。（九九・十一）

Ⅶ

再会

私流「あいまいな日本の私」

「もしかして、父の死は、あれは自死ではなかったのか」という疑問が晴れない。父が死んでほぼ二十年になるが、その死にようがあいまいな光を帯びたまま私の記憶に沈んでいる。それが、ふとしたきっかけで日常に浮かび上がってくるのは、「正月」のように、無方向な時間の淀みが形成された時だ。

重い糖尿病に加え、急性肺炎による喀痰不能からくる窒息死が直接の死因であることに疑問を持っているわけではない。要は、急性肺炎に至る「庭いじり」が、どう考えても無茶なのだ。その冬、二月のみぞれの降る日、下着姿のままで早朝から庭をいじっていた。母の制止などを聞く男ではなかったし、差し出したコートも「そこへ置いとけ」といったきりだったとか。母は、その時の無力を今もってかこっている。身内にも詳しく話したがらない。

召集直後から始まるシベリアの抑留生活を耐えたという自信からくるのか、病気に縁がなく、医者の大嫌いなスポーツマンだったからか、残ったものの憶測も途切れたまま話にのぼることもなくなった。「戦後五十年」といういい方では仕切りようもない私の中のあいまいさは、父の死のあいまいさにつながっているといわざるを得ない。

平成がもう七年にもなったという。その七年にもなった年のはじめに、いつものように父の死のことをふりかえっていた。田舎の診療所の傾いたベッドの上で、少し照れたように、断末魔の眼で〈来たのか？〉と問いかけ息をひきとった人の、死のまぎわの羞恥の表情を思い出した。あれは、やはり羞恥だった。戦後三十年、高度成長のとば口の、過剰で、大仰で、うそうそしいもの、彼流にいえば、「ガタガタすること」、「ジャラジャラしたもの」を生理的な嫌悪感で遠ざけ、死の床で自分の死に

ちょっと照れていた（はずの）父の姿を憶えておこうと思う。それはそれは、小さな死であった。成熟を断念した幼児のような羞恥の表情によってその小さな死のありようは、さらにあいまいな光を増している。あいまいと羞恥は、私が引き継ぐ唯一の父の遺産だったのかもしれない。（九五・一）

自転車

何年も前のことになるが、「クラスで、自転車に乗れへんの、僕だけや」と小学校二年生の息子がいうので少しあわてた。それほど彼とのつきあいをおろそかにしていたわけでもないのだが、自転車は盲点であった。「宿題ができたな、これは。」と思った。

しばらくして彼と私は、ある事情で別れて暮らさねばならなくなった。もしかするとこのまま会えないことになるかも知れなかった。明日別れるという日、近くの空き地で半日、彼とつきあうことにした。宿題ひとつ、果たさねばというあせりがあった。それほどの手間をかけずに乗れるようになり、ほっとして息子の笑顔を見たとき、これでお別れだ、と思った。次の日、そのまま別れた。

別れてしばらく、自転車に乗る彼の姿がふいに思い出された。家近くの海岸道路を走る姿を勝手に思い描いていた。再びともに暮らすことになった高校生の彼にあの時のことを聞いてみると、、「あの時から、つきあうともだちの範囲がひろがった。」という。

付き合いの範囲とは、山をひとつ越えた向こうの、元気で明るいやつのいっぱいいる町である。その町で、友だちといっしょに笑うこともわるさをすることも、自転車に乗りだんごになって遠くの町や、海へ出かけては、遊ぶことを憶えたようだ。彼なりに耐えるということも知ったようだ。「あの時がいちばんキラキラしている」と、しみじみという。その町とは誰もがよく知っている被差別部落である。遊びに行った先で、出されたごはんをことわったら、そこのお母ちゃんに叱られた、といっ

た話を聞いていると、その町で彼はどうやら、つきあいかたも教わったようだ。
いまの家に来る時、彼は粋な型の自転車をもって来たが、駅前で一月もたたないうちに盗まれた。かわりに、五千円の自転車を買ってやった。私のが四千円だから、決して安くはない。
気がつくと我が家には、そんな自転車が四台もある。上の娘も、妻もキー、ガチャンと音をたてて、それらに乗っている。下の四つになったばかりの娘に誕生祝いの小さな自転車を買ったので、ついに五台になったのは、ほん最近のことである。（九六・二）

再会

タカオとフェリシアというのは、サンパウロ在住の知人夫婦である。フェリシアは日系ブラジル二世だが、その彼女が日本列島の北から南にかけて点在すると聞いた「ご先祖さま」の墓を訪ねたいと言い出したらしい。その列島縦断墓参の旅についてくるというタカオとは、ほぼ三十年ぶりの再会だった。駅頭にあらわれた久しぶりの髭づらの大男は、「墓参り」につき合うというより、女房の思いつきに、黙って寄り添っているといった風情だった。
「ずいぶん遠くまで流れましたね」
「あんたに言われることはない」
「ぼくは、ずっとサンパウロですよ。そっちは連絡をとるたびに住所が変わっている」
そういえば、そうだ。ブラジルまで流れた男がそのままそこで住みつき、日本の私に連絡がとれないとすれば、流れているのは彼ではなく、私なのかもしれない。彼は駅前を見渡して、
「そういえば、この町であの頃、ドカチンしましたよ」
あの頃とは、一九七〇年代の初めのころである。港の立ちん坊をしては、あちこちでアンコやドカタの仕事をしながら、内職と称して絵を売っていた。出身は夕張の炭住である。

私は「一斉糾弾」あるいは高校紛争といわれる時代の新米教師だった。神戸の、ある画廊を借りて彼が開いていた個展会場にふと足を踏み入れて以来の知り合いだ。画廊に払う代金がないので、今から逃げようと思うのです。宿を貸して欲しい。という男を胡散くさく思わなかったはずはないのだが、とにかくその日のうちに親しくなった。私は長い糾弾の話をし、彼は夕張の話をした。バッグの中にはウイスキーと売れなかった水彩画が十点ほどあり、結局それが私の家に住みつき、何回かの移転をくりかえすうちに破損してしまった。いい絵だった。そのことを詫びると、

「どんな絵でしたっけ？」

「ブルーの、エアーブラシで描いた水道の蛇口と人影の水彩とか…」

「え？そんなのありましたか」

彼もやはりあれから流れたのだ。あの絵を忘れるとは——。フェリシアが横から、たずねた。

「このK市から、広島へ行けますね？」（九六・十）

ある、遠い手紙のこと

「……ぼくはお母さんにつき、弟はお父さんにつきました。これは親が決めたことでしょう。いつの間にかそうなっていました。そうなってから長かったです。結局、お母さんとぼくは出て行きませんでした。相変わらず、お母さんは朝早くから夜遅くまで店に出ていましたし、お父さんは、お母さんより早く帰った。でも、ぼくと弟が遊び疲れて帰ってきても家の中は灯っていませんでした。弟と用意してあった食事を温めて食べ、風呂を洗って入り、TVを見て過ごしました。……聖書にあった、キリスト教徒が集団で殺されるとき、競技場でキリスト教徒でない民衆が見守る中、肩を組んで人喰いライオンに食われながらも、また天国で会おうと、笑いながら殺されて行く話をよく思い出してい

ました。ぼくらが泣きつかれて眠る頃、お父さんが帰り、そしてお母さんが帰ってきました。そして、また争いが始まりました。……そんな時間がだいぶ続き――ひょっとしたらそんなに長い時間じゃなかったかも知れないけど、ぼくにとってはとてつもなく長く、いやな時間でした……古林センセ、元気ですか？」

料理修業をしている卒業生からこんな長い手紙が届いたのは、もう十年前だ。消印はアムステルダム。　なぜかこの手紙が捨てられない。それは何も文面を見て込み上がるものがあったからという理由だけではない。小学生が両親のすき間で「死」について考えていたという証言のゆえでもない。その後彼は独立し、小さなパブを開き、母親が家を出たと聞いた。

ある夜、そこを訪ねた。できるだけ明るく、ようーっ、やっとるな　などといいつつ――。若いマスターは、昔、私がこだわっていた、あジェームスディーンのような目つきで、表情を変えず、唇の片方を歪めただけだった。（九七・七）

夕立とナポレオン

「今年の夏は、夕立が多かったな」と、人に同意を求めるのだが、あまり肯いてもらえない。「そういやそうかなぁ」くらいが返事としては上等な方だ。

では、あれは幻だったのか。あのパチンコで負けたあとの火照った体に沁みた痛さや、コンビニで買ったアイスクリームをかばいながら走った下駄の音や、河堤を走る車の中で見た五十米手前に立った砂埃、その直後、フロントガラスが水しぶきで完全にさえぎられたりしたことは――。どうやら、今年の夏、私だけが必要以上に夕立に感応していたらしいという結論になる。かつては何人もすれ違っ

た人たちがいないのだ。夕立の中をキャッキャッと騒ぎながら走る子どもや、小走りにひといき走ったあと、あきらめて、ゆっくり歩く人たちがいないから私は寂しかったのかも知れない。

定時制高校に赴任してきた貧乏くさい一人の男に、一人の女生徒が声をかけてきた。放課後、「ここで待ってて」と一枚の地図を渡され、目印の喫茶店で待っていた。「いいもんおごったるから」とだけいった。何のための待ち合わせなのかも分からない。彼女が息をきらせながらあらわれたのは、一時間ぐらいたってからだろうか。全身がびしょ濡れだ。「いま、えらい夕立や。外は――。」といって水浸しのカーディガンを肩から外し、「ハイ!」といって、ワイングラスをその中から取り出した。グラスの中身はナポレオン。「先生、こんなん飲んだことないやろ」と笑っている。

店からこれをもって抜けてくるのは大変だったということ、雨水はグラスに入ってないということ、すぐに店にもどらなければならぬことを告げて、彼女はまた外に飛び出した。

その、激しい夕立のあった次の日、彼女は日朝混血であること。昼の看護見習い、夜の飲み屋で母と弟を養っていることを教えてくれた。私は初めてのナポレオンに礼を言った。

私の定時制で出逢った最初の生徒の話を、してみたくなったのは今年の夏の夕立のせいだ。(九七・九)

思い切り　咽喉をならして

この正月は、突如、咽喉(のど)を病んだ。たいしたことはないが、「限りなくぜんそくに近い症状をもつ咽喉炎」というのがミステリー好きの医者の見立てだ。

休暇中は毎日、咽喉のことばかりを考え、全身が単純な病んだ管になった気分だった。薬が途切れたこともあり、ぜんそく状態が二晩も続くと、クラクラしてくる。咳き込み状態の呼気と吸気のリズ

ムが、小刻みになってくると、どういうわけか、小さな「反省の群れ」が襲ってくる。やはり煙草を吸い続けたからだ。深夜の冷気を吸い過ぎたんだ。毒気を吐く癖と、毒気を吸う趣味を何とかしなければ。朝っぱらから人に話す職業に向いてないと思ってたんだ、ずっと。とかいった調子だ。これでは「反省する管」だ。少しは動こうと思う日があっても、すぐに管に逆もどりして、ひたすら、けいれんしていた。もうろうとして明け方、「君は呼吸の仕方をまちがっているよ。そうじゃなくてこうだろう」という声がして、その声の指示通りにすると、ふうっと、せきこみが消えた。確かに楽になったのだが、その明け方の声の主が誰で、どういった指示だったか、朝になって思い出そうとするのだが思い出せない。酸欠状態の妄想だとしても、ここまでくると、かなりあやしげだが、ありうる話としてきいてもらえないだろうか。

母が訪ねてきていたのだが、その土産話のなかに、「思いきり　鈴をならして　神を呼ぶ」という自作の川柳が何かに入選したことがあった。新年早々、私の病は、母の川柳でオチがついたと、ひそかに思うことにした。

しばらくして、息子が、「須磨の水族園前のバス停留所に女の幽霊が出るというので、正月に夜十二時過ぎ、友だちの車で通ると確かに居た。」という話をしてくれた。「その幽霊は、どうも震災以後、出るようになったらしい……」という。もう少し咽喉が安定したら、私も彼女を見に行くことにしている。今はまだ、冷気は禁物だから。（九八・一）

Ⅷ

風信

「怨念」はネクタイか

前略　校長・Nさん

先日の「神戸新聞」のインタビュー記事、まことになつかしく拝見致しました。あなたが被差別民としての怨念をたかが元国立大学学長の説得で捨てたなどというものだから、やはりどきんとするのです。怨念とはとりつくものであり、当人の都合でネクタイを外すようにほどいたりはできぬからこそ怨念だとばかり思っていました。かといって人のせいなどにせず、怨念を持つべきだなどといういい方を受容しているわけでもありません。くり返しますが怨念はとりつくものだからです。

それにしても大したものです。新聞紙上でその宣言をするあなたの、直ぐなる心のありようは私ごときにとても真似ることなどできません。あなたが尊敬してやまぬ老師の授業でのことばに対して、「狼に育てられた子は、人間になれるか、とぬかしおった」と怨念を肥らせるばかりの因島の部落の老婦人などは、あなたに較べればやはり無知の骨頂というしかなさそうです。怨念の捨て方講座でも開かれました折りには、先の老婦人共々、参席したく存じます。待っております。

あなたも、たしかご存じだったはずの、ほれ、かの〝海坊主〟が、こんなことを申しておりました。お忘れかとも思いますので念のために引きますと――転向は、抵抗のないところにおこる現象である。つまり、自己自身であろうとする欲求の欠如からおこる。自己を固執するものは、方向を変えることができない。わが道を歩くしかできない。しかし、歩くとは自己が変わることである。（「近代とは何か」竹内好）

裏切って校長職にありついたなどといういい方を、私は致しません。「自己自身であろうとする欲求の欠如」が、あなたにあったのだという痕跡が、新聞記事から匂うだけのことです。

あなたの着任された学校は、冬には雪につつまれるとか。滑落・転倒には特に注意し、お体を大切

にして下さい。以上要件のみ　一九九四・九（九四・十）

「窓際族」X氏へ

時あたかも人事の匂う候、さぞお疲れの事でしょう。清く正しいはずの教育現場はこの時とばかり、「生徒のため」も「自分のため」に一変し、少し薄暗くかつ生臭い季節を迎えるわけです。

腹を探る、肩をたたく、はずす、とりこむ、といった慣れない（？）暗い仕事に手を染めることになります。かけひき、直訴、たれこみといった行動が、それぞれを駆りたて、あげくには、芽をつむ、杭を打つ、生殺し、引導を渡す、糞をつかむ、二階に放り投げる、鉾をおさめる、などなど何とも人間くさい怨嗟の声に満ちてきます。すると春です。

ところで、私は決してこの季節は嫌いではありません。好きというほどでもないのですが。この通俗性こそ、私たちの業界が、いわゆる世間と相渉るための不可欠な接点だと思えば、それほど嘆くこともありません。ちなみに世間では、「窓際族」なる語は、とうの昔に死語となり、リストラの花嵐の中を吹き飛ばされているといいます。

お元気でしょうか。窓際に居て、しかも窓を拭いてばかりいるあなた。職員会議のあいだに描きつづけた「描画帖」は、もう何冊になりましたか。個展を実現しましょう。「喫茶マッド」と書いたメモ・カードを張り付けたコーヒーメーカーから毎朝コーヒーを注ぐあなたの時間が、あの人間くさい季節をくぐり抜けて獲得されていることを祝福したい気分です。

しかしあなたが、すでに十年以上もその位置に居つづけるのは、この人事の空騒ぎから生まれる分類法によってではないでしょう。追いやられたとも、奪取したともいえない微妙にして微妙な位置がなぜあなたにあてがわれるのか。それはおそらく、あなた自身がその位置を引き寄せているからです。

そんなふうに生きてきたのであり、それ以外のことではない。なにが仕事であり、なにが、仕事のふりをするだけの仕事かを知っているから。

若い人たちのため、偽りの窓際ではなく、由緒ある窓際は確保しておきましょう。そこには、ちょっとした勇気と少し苦い闘いの記録が埋まっていることにいつか彼らは気づくはずです。（九七・二）

私信にかえて

何年も前から私の、初任校M高校に対する関心事はほとんど君ひとりに絞られていたといえば、嘘に聞こえるだろうが本当だ。二十年にも及ぶ歳月の仕業に違いない。私の中ではM校の消えた後に君の残像だけがある。

私はいつも遅れて、来た。そして皆のいる地点にまでやっと辿りついたと思ったら、彼らは次の場所に　向けてすでに立ち去った後であるか、あるいは出かける寸前だったりして……。

君は、著書（「湊川、私の学校」登尾明彦著、草思社刊）の中で何度かそんな風にいう。君の眼には、私は「出かける寸前」の男のひとりだったのかも知れない。しかし、決してまちがわないで欲しい。「出かけた」のではなく、「追放された」のだという単純な事情を。しかも何人も追放されたという事実を。

……恵まれない体躯でゴンタたちのあららいだ声に眼をしばたかせながら向き合っていた彼……

と、詩人金さんが帯で紹介している。ぼくが追放される日も君は「眼をしばたかせ」ていた。それだ

けの別れだった。そんな時君にいらだったのは私の若さゆえだろう。「いろいろあるよじんせいは……」と、別れぎわにオモニたちのかけてくれることばが救いになったのも、その若さゆえなのだ。しかし、弱さといってもいい若さが、ことばを発見するという確信はいまも変わらない。私は「あの旧い校舎」でことばと出会い、そして別れたのだ。本書中の「阪神大震災と長田」は、読んでいてしんとなる箇所である。やっとそこで君のことばに触れたせいかも知れない。押しつけられたことばを使って「後始末」だけをする「黒衣的存在」の「後衛」だなどと自己規定してはいけないだろう。他人のする規定は他人にまかせておく方がいい。自分で処世の術を並べたてることもない。まして、いかに広告コピーとはいえ、「教師の原像、詩人の原像」などというのは、もっとも詩から遠い。

今の夜の学校で、それしか図書費の予算がこないという「アサヒグラフ」を見ていて、いきなり詩人金さんの、若い日のことばに出会った。若さゆえに前に飛び出すことばを、またひとつ見つけたことになる。

反体制側から体制側に回った者が、今度は反体制側を批判して自己合理化を図ろうとするのをわれわれ　は何人も見ている。例外は一人もいない。―「終りなき始まり」（梁石日）より―　（九九・六）

IX

鳥の闘いへ

一切れのニュースから

「警官隊を導入」といっても、インドネシアのことではない。兵庫の県立学校での、とれたての話だ。

「尼崎南（定時制）高校良元分校において今春の二次試験で障害を持つ受験生が定員内不合格になった」のがことのはじまりだ。「4月18日、障害生とその親、支援グループが抗議に出かけた。しかし、同校佐野校長は『今日は会う約束はしていない』『多数とは会わない』とこの日の話し合いを冒頭から拒否、同校事務長に指示して制服・私服を併せ三十名あまりの警官隊を同校校舎内に導入するという暴挙をおこなった」というのだ。

マスコミ対策も完璧とみえ、一般紙には露ほども登場しないニュースだった。私が知ったのは、「県高支部ニュース4・28付」によってだ。事実からすでに十日が過ぎている。いろいろな事情があろうが、とりあえず、組合員向けに発信した支部執行部の決断に拍手したい。情報過多などといわれる状況の内実は、情報独占と情報操作によって周到に形成されているのだということをひとつの組合機関紙があきらかにしたといってもいい。私たちは一枚の紙切れからさまざまな闘いが始まったということを忘れない。「警官導入」が、いかに正当化されようが、導入を実行した事実は消えない。一片の支部ニュースにより、佐野は「水に落ちた」のだ。

……悪人は、本来なら水に落ちなければならないが、そのとき誠実な公理論者は、「報復するな」とか「仁恕」とか「悪をもって悪に抗するなかれ」とかをわめきだす。（中略）善人はなるほどそうだと思い、そのために悪人は救われる。だが救われた後は、してやったりと思うだけで、悔悟などするものではない。（中略）もしこれからも光明と暗黒とが徹底的にたたかうことをせず、実直な人が、悪を見逃すのを寛容と思いあやまっていい加減な態

度をつづけていくならば、今日のような混沌状態は永久につづくだろう。……

（魯迅「フェアプレーははやすぎる」）

不合格にされたのは、目をあわせるだけで、月のように笑う少女だ。この少女に警官隊をさしむけてしまった佐野は、かっての私の同僚でごく平凡なただの教師だったが、障害生の高校入学運動で、警官隊導入を果たした男として、その名は兵庫県教育史に残ることだろう。（九八・五）

シナリオ風「もう一つの交渉」—副室長N君へ

おいおい「定時制の役割はすんだ」ってか？
ちがうな　それは——。もっと冷静になって、〈夜がこわい〉というべきや。思ってるとおりに〈夜はさびしい〉〈夜は汚い〉といい直すべきや。お前さんら総がかりで、〈夜〉壊滅作戦をすすめてるそうやが、ムリムリ。課長が「……すんだ」と過去形でいったのを、こっちの誰かが、「過去形でいうな！」と野次ったもんやから、「……すみつつあります」とでも訂正したんやったかな？　何とか副室長のあんたの上役、豆腐のおからみたいな話をするから、結構、手強いな。つつきにくいし、食えんわな。が、おぼえときや、明治以来〈夜狩り〉は成功したためしがないんや。〈夜〉は自己増殖するんよ。
（ここで静かにB・G・Mはじまる）
こんな夜に
きみがきてくれてうれしい
ぼくをしっかりつかまえてくれそしてコーヒーを沸かすのだ

話すことがたくさんあり
おもいだすことがたくさんある
こんな夜にふさわしい　（ボブ・ディラン）

〈こんな形で、こんな交渉の席であなたと再会するとは――。私に失望したことでしょうね。〉黙ってメモするあんたの声が、課長の声に混じって聞こえた気がしたもんで、ここは一つ、あんたも研究したとかいう魯迅を借りて、「うん、失望するも何もありませんよ。大体君を信用したことなんかなかったんだから」（半夏小集）とでもいっとくよ。「妥協」の意味さへ知らぬ輩がオレに「妥協せよ。大人なのだから」と、あんたらを加勢してるよ。元気出して、けど、〈夜〉から出発して、〈夜〉に帰ってきたら、もう〈夜はすんだ〉。そないいわれても、今さら帰るとこもないんで、オレはまた〈夜〉を作るよ。ところで最後にひとつ聞かしてや。いま、夜か？　昼か？　まさか、　朝？
（ここでまた、ボブ・ディラン静かに――）（九八・十）

土掘りはかたい道路をうちくだき……

知り合いの書店主が、本を呉れた。深紅の地に、ホームレスらしき渋いオヤジのポートレートを配した異風の本だ。「や・ちまた」（―王たちの回廊―みすず書房）鬼海弘雄の写真集である。浅草寺近くのビルの壁を背景に、行きずりの人を正面から撮っただけのものが一八二葉収められている。
工務店主、バーホステス、札幌出身の労務者、土木作業員、フリーアルバイター、職工、自作の服を着る人、旅役者、ねんねこの人、無口な人、重い財布を持った人、神戸から来た人、西新井から来た人、人形を連れ歩く人、ネジ製作工、熊の毛皮を着た大工、孫に会いに来た人……といった小さな

キャプションしかない。そのひとつひとつがみな、見おぼえのある、妙になつかしい写真集である。「ここには懐かしい同胞がいる」と網野善彦氏がコメントを寄せていて、「よく見ると世間の荒波の中で闘ってきた辛苦が表情に刻みこまれているが、心の底では世間などに左右されてたまるかという気概を覗かせている。」

世間に左右された分だけ、左右されてたまるかという精一杯の見栄が、どの肖像にもあふれていて、粋だったり、可愛かったり、野暮だったりするのだ。こんなふうに、白黒で眼の前の生徒たちを撮っておきたいとふと思う。キャプションはこのまえ授業で作ったそれぞれの歌でいい。

土掘りはかたい道路をうちくだき　下へ下へと降りて行くなり

（逆立つ赤毛は中学時代からのもの。唇のピアスは最近のもの。ニッカポッカ。）

お父さん仕事がないので出稼ぎに　いたらイヤだがいないとさみしい

（暗い表情のまま、いつも最前列に坐る女の子）

学校が休みの時はバイトあり　バイトのない日は　学校がある

（話し始めると止まらない。友人なし。）

――しし座流星雨の降る夜に　（九八・十一）

暗喩としての「林檎の木」

林檎の木が、パワーショベルで一本一本引き抜かれていく。思わず、その画面に見とれていた。残酷で執拗なショットが続くのだが、その引き抜きぶりは見事なものなのだ。恐らくは熟練の運転技師によるものなのだろう、儀式のような黙々とした作業が続けられる背景には、広大な、荒れた林檎園が見える。そんなドイツ映画を観た。観たというより、出合いがしらに眼に飛び込んできたというべきだろうが、何かの暗喩として、そのときの私をとらえたというほうが、さらに正確だろう。

ドイツ分断の直後に、東側に生まれた女性が、革命の申し子として育てられる。やがて政府の掲げる理想も色あせ、林檎園に就職。結婚をし家庭を持つのだが、園の所有主が彼女に言い寄ってくる。東西の壁が崩れるという時代背景の中で、林檎園の土地が売却されていく。そこで働く労働者が離散していき、女主人公が、その林檎園を一人で観に来る。生きなおすための新たな決意が、先ほどのシーンにこめられる。

跡地は、歓楽施設になるらしいが、その試みは失敗するだろうというナレーションが重なる。「林檎の木」という題名のこの映画をこれ以上論じるつもりは全くない。ただ、冒頭に紹介した場面を昨年、震災復興や定時制統廃合の場面でもっともらしく飛び交った邪悪なキーワードの一つ、「スクラップアンドビルド」の暗喩として観たことは触れておきたい。「『スクラップ』は丁寧にやるべきだ。あの丁寧さは安直な『ビルド』を許さない。あるいは安直な『スクラップ』作業の上には、安直な『ビルド』が準備されるのだ――ということの暗喩だ、これは。」

故郷に、もう家はない。ただ、その跡地に亡父の植えた玉石の木々があり、去年の暮れに土地の植木屋に頼んで、その内の数本を引き抜いてもらった。見おぼえのあるサルスベリの成木や沈丁花やつつじ、椿といった木だが、いずれ駐車場になるという廃墟から、わが家の庭に運んだ。もし、丁寧に抜かれて、丁寧に植えられたのなら、（植えたのは私！）この春、何かの花は咲くはずなのだが――。

（九九・一）

二つの手記より

「私は二〇年前、通信制の青雲高校から尼崎南高校に強制配転された。尼南の生徒たちを前にした転任のあいさつで、『私は強制的に異動させられた。青雲高校に復帰するために提訴している。尼南高校にくるつもりはなかっ

た。』という意味のことを短く話した。最初の四年生の授業のとき、生徒たちは『定時制高校で仕事をしたくない教師と勉強するつもりはない』『なぜ定時制高校を馬鹿にしたのだ』とつめよってきた。……」（パンフレット・「尼崎南高校があるから私たちは勉強できるのです」中の尼南教諭・山崎貢さんの手記より抜粋）

その山崎さんが尼南存続要求の先頭に立っていた。

「文学史の時間、保元の乱で讃岐国に流罪となって果てた崇徳上皇の話をしていた時だ。『先生、流罪ってなんなあ』と一人の生徒がからんできた。わからないから聞く態度ではなかった。（中略）はっとして、聞いた。『お前、讃岐の出身やな？』『そうや』 わたしは何かでどやされたような気がした。讃岐に住むことが何で罰になるのかという事であった。……」（河田光夫著作集〈明石書店刊〉第二巻中のエッセイよりの抜粋）

親鸞研究で知られる著者もまた定時制高校教諭だった。「親鸞は越後国に流罪となった。罪として住まわされた都の知識人親鸞と、そこに住む事が唯一の生活である越後の民衆との葛藤がきっとあったに違いない。」彼はその小文に「定時制生徒に学ぶ」という題を付している。

手記はともに、ある「発見」を語っているだろう。拒絶のあと、どのような月日が過ぎたのか。親鸞はさておき、からんでつめよってきた者との葛藤を経て「発見」した生徒たちの素顔が、たとえば「定時制をつぶすな」のたたかいの底を支えている。そんな感触が伝わるのだ。それは「不服申し立て」が生き方となってしまった一教師を囲む生徒、ＯＢらによる抗議集会を見たときに感じた感触でもある。

強配への「不服」が、定時制つぶしへの「不服」と重なるかぎり、たたかいはさらに遠くて、深い。

（九九・三）

「正しさ」ばかりが降りつもり……

「生きる力を」「心の教育を」「多様な個性を」大切にしようといった用語が、行政側から、バラバラと降ってくる。

さまざまな民間教育運動（とりわけ同和教育運動など）から生み出され、「管理」「競争」「差別」に対峙してきた用語のカケラだ。

このカケラは、いまや小学校から大学にいたるまで、教員対象の各種研修会、保護者むけの講演会の場に降りつもっている。

「管理」「競争」「差別」は、高度にシステム化され、もはやあえて言挙げしなくとも現場に定着している。わざわざ反感を集めなくとも「正しいこと」を教育改革や人権の世紀に向けたレトリックとして採用しようといった意思統一が、どこかでなされているはずだ。

「正しいこと」を、口に出していってみるとわかるのだが、少しはずかしい。その、はずかしさはどこからくるのか。私なりにまじめに考えているところだ。たとえばだが、「低学力でがんばっている子は、なぜがんばれているのか」といった問いにはっきり答えられない。その問を突き破れぬかぎり、やはり「正しいこと」は深い自己欺瞞に包まれる。しかめっ面で黙るしかない。

十二万人ともいわれる高校中退者対策として、あちこちで新設総合制や単位制高校が準備される。十二万人の原因は放置されたままその数は増えるばかりだ。トライやるウィークで「働くこと」の重要性を強調しつつ、定時制をつぶす。矛盾が矛盾とならない。カケラをバラまくものたちは、現実をごまかしていることは承知の上なのだ。

降りつもる雪のため、風景が消え、新しい〈雪景色〉が現出する。その、絵のような景色が、いっとき人々の眼を奪う。しかし、雪解けの道を描いたブラックの絵が、私は昔から好きだ。（九九・五）

そして、鳥の闘いへ

二羽の鳥が激しく争っている。互いに全力を尽くしているのだが、いつまでたっても決着がつかない。力が伯仲しているのだ。かといって、お互いに逃げるわけにはいかない。そのうちに双方はある種の心理的葛藤状態に陥る。すると、突然、自分の羽を整える所作にでる。緊張を回避するように、緊迫した膠着状態から身をそらすように、とぼけてみせるという。生物学的には、そう言った行動パターンを、「転移性整羽」というと、ある友人からきいたことがある。

私の、「整羽」行動のひとつに、タバコに逃げるというのがある。おかげで、未だに禁煙は成功していない。緊迫した膠着状態というやつと縁が切れない。きつい交渉ごとなどが続くとたちまち、整羽的喫煙状態にすべりこむ。今のところ、この行動パターンを変えられそうもない。　五、六年前になるだろうか、三カ月はもった禁煙が一夜で元の木阿弥というのがあった。昨年などは、やたらにタバコのお世話になったような気がする。

羽を整えているうちに、直前の緊迫した状態に戻る道を忘れてしまう、というか回避するということはないのだろうか、と聞くと友人の生物学者は、二羽の鳥たちは再び闘いの態勢にはいっていき、そのあらそいは、えんえんと続くのだという。

タバコに火を点けたとたん、そのまま闘いの埒外に「転移」してしまい、いきなり闘いそのものが、うち切られるというのは私たちの周辺でありがちなことだ。妥協だ、知恵だ、判断だと、うち切りの理由が述べられる。しかし、やはり「整羽」と「放棄」は違う。

〈組合〉1学年7クラス規模で、うち夜間は3クラスということだが、昨年統廃合が発表された4校では今年度の入試で、西宮西九十一名、東神戸六名、尼崎南三十六名、武庫二十四名が入学している。これらを合計すると百五十七名にもなり、新設高校の3クラス百二十名ではとても足りないではないか。

〈県教委新設高校推進室〉私たちは全ての生徒に入学を保障するという考えではなく、定員の枠内でとっていく考えだ。こちらの調査でも阪神間の中退者は年間三百五十名いるがこれら全員が入学を希望することはないだろうし、仮にあった場合についてすべてが入学することはできない。

本部定通部交渉（7／19）での安随室長発言は、予想していたとはいえ、「活性化のための統廃合」という名分をさらり脱ぎ捨てたものだ。ここらで、タバコを一本――。

そして鳥の闘いのはじまりだ。（九九・八）

無職少年？

「……神戸市東灘区の無職少年（一五）、西宮市の私立高校一年（一六）、同市、無職少年（一六）、同市無職少年（一七）の四人を逮捕した。」（二月二四日『朝日新聞』）ひったくり窃盗の疑いで少年らがつかまったという記事を目にした。よくある「少年犯罪」報道のひとつだ。

かつて「有職少年」こそが、犯罪予備軍としての呼称であったが、今ではすっかり「無職少年」が、それに取って替わったようだ。本来、少年は「無職」なものだろう。そういった常識が「有職少年」を、その薄暗い存在感と共に、異分子扱いしてきたはずであった。「無職」と「少年」とが、違和感を伴わずに新聞紙上で合体してしまうのは、「無職少年」という語で伝わってしまう隠された意味があるからだ。その語感は「有職少年」より一層悲惨なイメージを喚び起こす。しかも、そうやってやりとりされる「無職少年」の存在や意味を、封じ込めてくるものがある。その元凶となるものが「教育改革」である。なぜ

なら「教育改革」騒ぎの中では、「無職少年」はすでに消去された少年たちであり、「中学を出て、高校へも行かず、仕事にも行かない、手に負えぬ少年」だからだ。

行かないのではなく、行きようのない少年らが、風の強い夜、「帰宅中の女性を狙い、二人乗りしたミニバイクで近づき、かばんをひったくり」(同記事)に出ている。「少年犯罪、戦後第四のピーク」といった統計と、「教育改革」「雇用対策」が切り結ぶこともなく、だらりと情況の両端にぶら下がったまま。そのすき間を「無職少年」のバイクが疾っている……。

私の学校のある「無職」の少年が「……聴いてくれる人の前では、受け入れる準備のある人の前では、だれでも少しずつ、話し出すものです……」といった内容の、変型判の小さな本(『この気持ち伝えたい』伊藤守著)を「……センセ、オレらのいいたいことは、こういうことや。これ見て、泣いたんやで……、みんな読んどるで」といって貸してくれた。ごんたの代表気取りで、照れたような口調としぐさで、そういって、ふいとドアから消えた。しばらくして、バイク事故により欠席するはめになったのだが……。職のないアイツは、まだ、「定時制生徒」ということになるのかなあ。学校と切れると、これ無事「無職少年」の出来上がり。切るわけにはいかない。

今夜もまた風に混じったバイクの音が聞こえる。(二〇〇〇・三)

「変わります」か?

ある日、職員室の机の上に「兵庫の高等学校が変わります」と題するパンフレットが置かれていた。「県立高等学校教育改革第一次実施計画」というサブタイトルが右肩にある。従来の県発行パンフなら、このサブタイトルがメインタイトルとなるところだが、「変わります」というのがメインタイトル。中

学生徒も含め不特定多数向けのタイトルということか。この冊子編集に関わった主事諸氏の「会心」の編集方針が最も端的にこのタイトルにあらわれていることになるのだろう。タイトルをひねり出したときその編集会議は無事終了し、「新進気鋭」の主事諸氏は、めでたく現場の校長の椅子を手に入れ、ムチモウマイにして時代遅れの現場で威張り返っていることだろう。　かって数々のタイトルをひねり出した経験のある私は、「見出し屋ケンちゃん」と命名されたことがある。つまり、タイトルにはうるさいのだ。兵庫の高等学校「を変えましょう」「は変えねばならない」……いや、それでは弱い。あれこれ異論を一発で倒すにはもう、「変わります」くらいが良い。……そんな編集会議があったはずだ。あるいは、それに近いやりとりは確実にあったというのが、見出し屋のカンだ。

「遅れた現場、先進的な県教委」といった俗説が、あちこちでささやかれる。「単位制」導入などの先棒をかつぐ現場が登場してもおかしくない。しかし、おおかたの現場は醒めている。「管理」「画一」を推し進めてきた県が、そのことの「自己総括」をせぬまま「変わります」というのは、スケールは違うが、敗戦後、「軍国教育」の総括をせぬまま「民主教育」を唱えた図柄に酷似している。新校長になった元主事N君、あたりを冷静に見てごらん。焼け野原が見えないのか？　戦災孤児が眼の前でおびえているだろう？　敗戦処理をしてから「変わります」というべきなのだ。

中曽根臨教審以来の公教育における国家の責任を矮小化し、「私」の責任を極大化させようとする動きは、「個性」「自己責任」「選択」といった言葉で〈孤児〉を縛りつけている。悲鳴を上げている子どもたちに「生きる力」も「ゆとり」も、相変わらずの〃念仏〃にすぎないのだ。

（ところで佐藤学氏のような教育学者がやっと登場してくれたことで、「教育改革」が少し見え始めた。壮大な「改革」計画のほとんどが、放置されたスクラップの上の「変わります」幻想であることを、私たちも学んでいかねば――）

（二〇〇〇・四）

ある「授業」

軽く酔ったまま、ふらふらと自販機の前で煙草の銘柄をさがしていると、暗がりから声がした。「センセ、K校のコクゴの先生や」見おぼえのある顔だが、名前が出て来ない。「ナニをさっきからウロウロしてるん？」「んーーと、オオッ、こんな夜中に何をしとるんじゃ」と酔っぱらいであることを強調してみる。「センセか、こいつ今失恋中なんや。」と彼の横の連れが説明してくれる。よく見ると、その世話好きさんの周囲にも数人いて、無造作にギターを置いて、夜の駅前で陰気な激励会をしている最中のようだ。「センセ、こいつの歌聴いたってーー。自分で作りよったんやで。」と、先程の世話好きがいうので「よーし、聴いたろ。しかし、うるさいぞ、オレは」と、さらにさらに酔っぱらいであることを押し出しながら、へたり込む彼らの前に座り込んだ。むろん路上だ。陳腐なロックのリズムの中で、静かに消えてゆく酔いを押し殺し、とにかく一曲聴き終えた。「『人は誰でも、この町で恋をし、そして別れ……』ちゅうのは気に食わん。ひとは誰でも、の中にオマエはいるのか、オマエがいるなら、ひとは誰でもと歌うな、オマエを歌え。オマエの中の少年を歌え。」と酔っぱらいらしく、しっかりからんでみると、「フンフン、センセわかってるやん」「こいつ、中学の時のカノジョ、全日のやつにとられたんや」と、いろいろ返しがくるので、ひとまず立ち上がり、「オレが一回詞を書いたろ。」といってしまった。「授業、おわり！」

夏休みに入る直前の或る夜、彼は約束の詞を職員室まで取りに来た。その詞に曲をつけると喜んで帰ったのだが、それきり、学校に顔を見せることはなかった。後でクラスの出席簿を見ると、四月を除けば詞をとりに来たその日だけが出席。あれから田舎の小駅の駅前ライブにぶつかることもない。

（九八・十二）

X　箱ひとつ

異動希望

―北井さん、浅田さんの退職の日に

希望で異動をするということを一度はやってみたかった。知り合いにそのことを話すと、たいていの場合、「アト、三年しかないのに……。今のとこで、のんびり行けばよいのに……」といってくれる。あと二、三年しかないということをあまり意識したこともなかったが、異動を実行してみようと考え始めたころから気になり出した。十年ほど前、「幕の引き方にも、いろいろある」といって、五九歳で退職した先輩を思い出した。どうもわれわれの業界では、最後の二、三年は、「のんびりと」というのが、定説となっていて、そこが評判の「静かな」学校なら、「幕の引き方」など考えずとも、ひとりでに幕は下りてくるということらしい。あの人は、「のんびりと」下りる幕などないことを、よく知っていたのだ。

とはいえ、居心地のよいお湯につかって、出るに出られなくなったまま過ぎた二十年が、私の教師歴の主要部分となった。授業で誇り得る実績もなく、何かの会合に出れば意地悪な発言以外した憶えもない。サンタンたるものである。

泰西古代の哲人は「隠れて生きよ」と訓えました。東洋では隠者を位置づけて「少隠は山林に隠れ、中隠は市井に隠れ、大隠は朝廷に隠る」とか申します。講壇に隠れるのは、どのランクの隠遁者という話になるのでしょうか。唯のインポテ？多分そんなところでしょう。……駒場は本当によい隠れ家でした。もうしばらく置いて頂きたい気がしてきました。「定年制度なんて何故あるんでしょう」「後が列をなしてつかえてるからさ」オ後がヨロシイようで！（廣松渉氏の東大退官時のあいさつより）

私の方から校長の肩を叩き、口頭で「異動希望」したのだが、その日のうちに速決。彼の「利益」と私の「利益」は、一致したといえる。なぜならもう、肩叩きの季節はとっくに過ぎていたからだ。教師たちに、ある分掌を「希望させた」うえで、「希望した」と言いくるめる。そんな人事を進めるのを自分の才能だと錯覚している男だ。私は「希望する」ということを、教えたつもりだが、たぶん彼は「希望させた」と吹聴するだろう。転勤の挨拶では、面倒なことだが、希望することの歓びを、わかりやすく伝えておこうと思う。

廣松先生のようにはとてもいかないが、私は幕の引き方の研究に「アト二、三年」を費やすつもりだ。最後に、北井さん、浅田さん、本当にお疲れさまでした。（九八・三）

二十年目の春の夜に

なのはなの　はたけのうえの
きんいろくもは
しょうねんの　くちぶえつつんで
うかんでる

はたけがそよいで　くもがゆれ
くちぶえ　はたけにちらばった

高校生の頃、ひらかなだけで書こうとしてできあがった詩らしきものだ。それをふと思い出す。思い出すというより、ほとんどの記憶が色あせて再生不能だというのに、これだけはすっきりとなにか

の折りに浮かび上がってくるのだ。しかも、この詩らしきものの中の「しょうねん」という語が気に入らないので、「わたし」や「あいつ」と入れ替えたこと、二連目ができて、一連目はそれの補足のようにして書き加えたことまで憶えている。

何かの文集に載ったのを見て「児童詩やなこれは」といった漢文の教師に「この二連目のどこが児童詩ですか」といい返したことも、いまだに忘れることがない。

二連目を噛んでみると、もう「しょうねん」であり得ない自分にこだわっているような苦みがある。しかし、いつ、どうしてこの詩らしきものを書いたのか、肝心のところがはっきりしないのだから、これ以上の自作解題は詩の上に嘘を乗せてしまうことになる、止めるしかない。

異動を、希望によって実現できた。どちらかといえば、さわやかだ。しかし、授業が気になる。わたしは一晩考えて、来週から始まる授業の冒頭で、二十年ぶりにもう一度、「なのはなの……」と大きく板書することにした。

前々任校で強制配転の内示を受けたとき、夜間中学を卒業して入学していたオモニ達が焼肉屋で唯一の送別会を開いてくれたこととあわせて、彼女たちにも、この詩らしきものを板書したことを思い出してしまった。（九八・四）

箱ひとつ——Nさん追悼

Nさんから、託されていたものがある。段ボール箱ひとつ。金目のものなどであるはずがない。中には、もう黄ばんだり赤くしみなどの浮いたりした、よれよれの書類の塊り。その、小さくしまわれた老人のような紙の束を、「あなたに預かっておいて欲しい。」と頼まれたのは、Nさんと近くの海で釣りをした帰りだった。

その年に退職することになっていたNさんは、放課後になるとよく遠くから目で合図を送り釣りに誘ってくれた。英国製のホームズ帽をかむって、西日に向かって糸を垂らすNさんの記憶は、出来すぎた映像となって今も私の中で鮮やかなのだが……。

その日は、釣果はなし。思い切り放屁しながら黙々と端正な釣りをするNさんを、私はこっそりおもしろがっていた。竿をたたんで車に近づきトランクを開き、道具をしまったあと、重そうにその中から、箱を取り出し私をよびとめたのだ。

昭和四十五年前後にあった「紛争」関係の資料である。生徒のビラ、答辞、会議録、抗議文、Nさんメモなど、十年前にこの学校に配転されてやってきた私の立場からは、直接には無縁の紙類としかいえない。「この十年、この箱を誰に渡したものやらと、ある所に積んだままやった。預かっといてほしい。」というのだ。「紛争」を否定するどころか、あの時の自分自身をさえ自虐的に言いつのる同僚や、「時代が違う」という若い組合官僚を見てると渡すわけにはいかない。生徒ひとりひとりの抗議の声を無にさせたくない、というのがNさんの言い分なのだ。私は固辞し、とにかく、よければ見せてくださいと預かったままで、うっかり十年が過ぎた。

Nさんが亡くなったのは、この春。住職でもあった彼の寺で葬儀があった。桜まつりとかで町中は花びらと雑踏で埋まっていた。今の職場への辞令を受けて直後のことだった。

〈では、私はこの箱をどうすればいいのか？〉

境内のもくれんの葉を見ながらぼんやりと考えた。（九八・六）

「その姿をかしかりけり」―年頭所感

杉山をとほりて
杉山の中に
一本松を見出でたり。
あたりの杉に交って
あたりの杉のやうに
真っすぐに立ってゐるその姿
その姿がどうもをかしかりけり。
（「杉山の松」木山捷平　昭和三年）

ふと、自分で自分のことが、をかしくなってくることがある。よくもまあ、今の今まで教師面をして立ったものだと。

とうとう最後の年を迎えたことになるが、この感慨は深まるばかりだ。案外これは、退職を前にしたものの平均的な心情ではないのだろうか。社交辞令でも謙虚でも、ましてや自虐などではない。松が杉になりきれず、「その姿がどうもをかしかりけり」。その、すこしずれた姿が、決して嫌いじゃない。むしろ好きだ。「をかし」いのだ。他の生き方もあったろうが、自分なりにそのずれをひきずったまま、とにかく一つの職業に生きた。そのずれこそが、退職後の活力になるはずだ。ずれとは、退職になるまで、保留しておいた宿題のつまった箱なのだ。

ところがそのずれを喜ばない人もいる。「教育者としてかく生きた」といった退職記念の本が送られてきたりすることがある。退職が、ひとつの達成であり、完結であるような文章を読むのは苦しい。

だから読まない。何よりも、こちらのずれを守るためには無駄なことだ。しかしそのような本にも、ずれを自覚したゆえの「アリバイ証明」や「遺言」のしつこさがあり、あるせつなさが漂うこともある。ずれはずれでいいではないかと、肩を揉んでやりたくなる。

来年の春まで、「まっすぐに立ってゐるその姿、その姿がどうもをかしかりけり」でいこうと思う。

（二〇〇〇・一）

飛ぶ蒲団

風の強い、眠れぬ夜だから、思い出してしまった話がある。実話ではあるが、ほとんどの細部は、私の勝手な想像であることを断っておく。

妻と別れて、一人で団地の五階で暮らし始めた男がいた。元妻に「自立しなさい」などと言われたかどうかは知らぬが、とにかく朝はちゃんと朝食をつくり、蒲団をベランダの手すりにかけたあと、新聞を読みながらトーストをかじり、コーヒーを飲む。やっと慣れ始めた静かな休日の始まりである。ゴロゴロした後、外出することになり、ふと、蒲団のことを想い出す。ベランダに出て見ると、掛けていたはずの蒲団がない。あわてて下を見る。蒲団は、団地の敷地をとびこえて、向かいの民家の塀に不格好な形で丸まっている。〈フトンバサミ　フトンバサミ〉男は自分の家事の粗さを責めながら、階段を駆け降り、蒲団落下地点へ急ぐ。〈そういや今日は風が強い。こんな日は、やはりフトンバサミだろう。〉男は独り身の蒲団を、はからずも公衆の眼に晒してしまったことを後悔しつつ、少し悲しくなってくる。〈……でも、がんばる〉

蒲団を担ぎながら道を歩いたことはあるだろうか。自慢じゃないが、私にもある。だから、その男

の気持ちはわかる。わかるが、彼の場合ほど、蒲団は遠くに飛んだわけではない。公道を、日曜の朝に蒲団を頭から全身にかけて垂らしつつ往く男は、外目にはどうあれ、まっすぐ前をみていた。私などより、はるかに誠実な、ひとりの教師であることにかわりはない。蒲団はもう飛ばさない。

今夜もまた、冬型の気圧配置が強まっているらしい。何かの倒れる音、はためく音、ずれる音がする。（二〇〇〇・二）

「人間ドック」にて

胃部検査のあと、部屋を脱けて、ひとり喫煙コーナーにいると、松葉杖の青年が私の横に来て、「ドックですか？」と話しかけてきた。高校を出たあと、自動車整備工の資格を取得し、なんとかニッサンの工場に入れたものの、自動車事故による、骨の飛び出す「開放骨折」とかで入院中だという。すでに八カ月が過ぎ、「今年いっぱいはまだ出られません。なんとかいう、フランスから来たリストラの王者とかいうオッサンのこともあり、職をクビになるか、ならないか大丈夫だと思うのですが、よくわかりません。」職場全体が「人員整理」の恐怖で蒼ざめているともつけ加えた。この退職予定者のための人間ドックに来た男を彼はどう見たのか知らない。彼と別れて部屋にもどった。少し眠ったあと、トイレに行った。あかりの消えた喫煙コーナーをのぞくと、彼の松葉杖の影が見えた。あのまま青年は眠り込んでいるようだ。

いつ見ても本を読んでいる老先生と同室だった。眼鏡の度の強さは少し離れててもわかる。本と眼の距離は二十センチだ。どちらからともなく眼が疲れるという話になる。「定時制にいますと、ガクッ

と眼が衰えます』『どこの定時制？』という具合に、会話が成立してしまった。退官を直前にしたG大教授であり、かつて「定時制生徒」のための入学枠をつくった頃の話をしてくれた。「実はあのときのKさんは、私の教え子です。」と私がいうと老先生は眼鏡をかけなおした。二人ともかなり饒舌になっていた。「あのときは、たいへんでした。みんながんばったですね。結局あの入学制度は、KさんやWさんのあと続きませんでしたが……」　あるなつかしさがこみ上げた。「時間」はこんなふうに流れていたのか。

少し腫れているような気がすると言ったために超音波の撮影を受けるはめになった私の「大事なところ」は、単なる水ぶくれで、ホッとしたが、そのとき映し出された映像を、私は一生忘れることはないだろう。それは、見事な球形をしていて、闇を背景に静かに浮かんでいた。宇宙の映像といわれても疑うことはないだろう。教師稼業の「身体的総括」としての今回のドック体験は、私の中の「時間」と、ある小宇宙発見という収穫をもたらしてくれたようだ。（二〇〇〇・五）

私史断片

―記憶の闇におびえつつ

一九四〇年　十月三日　奈良県桜井市の古林清治とたか子の三男として生まれる。二男病死、四人兄妹。「信用組合」職場結婚だったらしいが、母は退職。

一九四四年　父清治が召集され、満州へ。母乾物商を始める。

一九四五年　敗戦

一九四九年　父清治、シベリア抑留より生還。大阪府立の農業会館職員として採用される。

一九五四年　父清治、「農林省汚職」事件の末端に連座し、懲戒免職なる。家の中は「差し押さえ」の赤紙で満ちあふれた。

一九五五年　母たか子、乾物商をたたみ毛糸店を始める。

一九五九年　毛糸店倒産

生家の向かいは、神農組の親分、右隣りは老舗の瀬戸物屋、左隣りは真宗寺、だった。我が家の玄関を出ると、眼の前は巨大な木造三階建ての香具師の元締めの事務所兼自宅だったが、その二階部分の表に面した手すりに、よく三人姉妹の誰かがいて、けんちゃーんとからかってくる。無愛想にうつむく癖は、それ以来身についたのかも知れない。

何かの興業（例えばサーカスなど）があると、人の出入りが激しかった。エイちゃんという男衆がいて忙しそうに立ち働いていた。ションベンタレと呼ばれていたが、近所の子たちとよく一緒に遊んでくれた。夫婦喧嘩をすると、まず母の方は足もとのワレモノに気づかいながら瀬戸物屋に逃げ込み、父はふてくされたあと親分のところで酒をよばれていた。寺へは兄妹が逃げ込み境内で遊んでいた。父の出征後、闇市（と呼ばれていたが、戦後何年か経って公設マーケットとなった。）の一角で乾物商を始めることが出来たのは、親分のおかげだと、だいぶあとで母から聞いた。巨大なリュックを背負い買い出しに行く姿と警察につかまり疲れきって帰ってくる母の姿は忘れない。免職されたあと、連日連夜、お向かいさんに「出勤」する父は、元の皇国青年の面影もなく、内に「シベリア」を抱えたままま一九七四年他界した。

小学校から高校まで、友人たちの家は、父のいない家と、いる家にほぼ二分されていた。父がいるはずなのに、父がいるということで本来生まれるはずの安心感のようなものは、感じたことがない。「戦争」が、記憶の全面を覆っている。いま、幼少期の記憶の背景にこれ以上迷い込むことに恐怖を感じる。しかしいずれ訪ねてみたいなつかしい露地があちこちにあるのは確かだ。

一九六〇年　同志社大学・文学部入学

一九六三年　実家は他人の手に売り渡されて、新しい住人は「種苗店」を営んでいた。

一九六五年　同志社大学卒業

入学通知が来るなり、家財道具といっても、本立てと洗面器とバイトで買ったウクレレと毛布を自転車につんで桜井から奈良を経て、京都までほこりにまみれて疾走（？）した。洗面器の中の小物がカラカラと音を立てた。東寺の塔が見えても紫野の下宿まで不思議なほどに遠かったことを憶えている。

大学では、その当初からデモの渦に巻き込まれた。そんな時代だったのだ。惚れた娘の近くの下宿に文学部先輩の岡田一衛さん（青雲闘争のとき物資販売でお世話になった浜坂の人）がいて、「ぼくは足が悪いので参加出来ないが、君は行かないのか？」と口説かれたのがきっかけだった。さりげないオルグだった。自治会室と「文学研究会」（後輩に詩人の清水昶や正津勉がいた）と、バイト先の毎日だった。

「古代歌謡」の土橋教授の時間だけは欠かさなかったが、大学は時代のエネルギーが吐き出す熱気の中でかすんでいたようにしか見えない。現在どこかで哲学の教授をしている山川偉也は、超然とギリシア語に没頭していた。同じ下宿の彼に仕送りがある度に合成酒を飲みに誘われた。「静」という騒々しい飲み屋だった。うな丼屋と木屋町の芸者と、ホルモン屋の娘や息子が私の家庭教師の相手だった。日曜・休日は、中之島（大阪）の橋の下の鍋取りや、プラスチック工場などで働いた。最も助かったのは、仮眠の部屋のある、時間割優先、めし付きの喫茶店「男爵」だった。ふだんは出町柳の二つ玉らーめんと、豚汁屋が食卓だった。元祖チキンラーメンもありがたかった。それ以上に、「男爵」には、元米兵のハウスメイドだったという賄いのおばさんがいて、思い切り、油を使った料理を食べることができた。彼女は私のことを「夢見るユメオくん」（「平凡」連載のマンガの主人公）と名づけた。おそらく、ユメばかりを語っていたのだろう。ヌーベルバーグ全盛だった。フランソワ・トリュフォーが好きで、よく話をした。トリュフォーのような映画作家になりたいなどという子どもを相手に、ハウスメイド時代の話などを聞かせてくれた。母からは、かぼちゃや米と手紙が送られてきた。仕送りは、ついに一銭もなかった。同宿の共産党員と論争しながら、送られてきたカボチャを食った。彼との奇妙な友情は「八鹿」で切れるまで続いたが……。

正月や夏休みに帰ると、移り住んだ新しい家で、父と母は無言で向き合ったまま、ビニール加工の機械のペダルを踏んでいた。先祖からの田地田畑は祖父の代でほぼ尽きていたが、父と母の代で完全消滅していた。六〇年代は、私の中でその幕を閉じ始めていた。

ところで、あの熱の中で出会ったたくさんの男たちや女たちと、確かに出会ったはずなのに、しっかり別れた記憶がない。もしかして、ある日、会わなくなってそれきりという関係を、私は何の痛みもなく自分に許してしまったのだろうか。ここでも記憶の背景に広がる闇がこわくなってくる。

一九六五年 三月　大阪「暮らしの装飾社」入社、すぐ退社

十月　県立湊川高校赴任

一九七二年　結婚

一九七七年　「影とやさしさ」（明治図書）出版

大阪丼池の繊維問屋街にあった業界誌に入社したのだが、映画監督への夢が尾を引いた。退社して、映画「怪談」（山本薩夫監督・ニンジンプロ制作）の宇治のロケ現場へ助監督としてまぎれこんだが、これも体力、金力が続かず無断欠勤。人間相手の仕事などできないと、いいつつ、教師になっていく友人を横目で見ていたが、「神戸に定時制の空きがある。辻という先輩がいる。一学期はがまんして、どこかで時間講師をして……」という相談にいった安永武人教授のすすめで、武庫工業高校臨時講師になった。京都の下宿に積み上げていたガラクタの世帯道具を持ち込んで、保健室の一隅で仮住まいを始めたのが、教師稼業のはじまりだ。その後、湊川赴任が決まった時、「あそこにはフクチやヤマダという悪いのがいる。近寄らぬように」と校長がいった。正確には福地先生は、すでに尼崎工業高校に転勤したばかりであり、山田先生は湊川高校に籍を置いたこともない。要するにまだ、「勤評闘争」がくすぶっていて「廻状」がまわっていたのだろう。二人の悪党の名前を聞いたとき、まず好奇心が動いた。「そこまでいわれる教師って、どんな人だろう。」それにフクチさんの「落第生教室」の話は先の党員から学生時代にすでに聞いていた。六〇年代は、妙な精神回路を持っている。「嫌われる奴、恐れられる奴」だから魅かれる性癖がある。私は明るく「ハイ」と返事をしたのをはっきりと憶えている。

湊川に来て、最初の県高支部ニュース（？）に書いたのが「部落問題は、非部落民問題である」という文だ。或る日、学校へ出ると、校長室から怒鳴り声が聞こえた。「こういう若いのがいるのに、地下の子を何故学校からしめ出すのか。何故プールを開放しないのか。」といった趣旨のカチアゲであったと思う。私の処女作を机にたたきつけて時の校長に迫っているこの人が、悪党のひとり、フクチさんだったのだ。私はこんなふうに福地さんと出会った。尼工からの帰りだったのだろう。

「学校は替わったが、現場は二つあると思えばいい」というのが当時の福地さんの言い分だったと思う。もうひとりの悪党に会うのは、まだそのあとだ。執行委員会の席で、「闘争」とか「闘い」という議案書か何かの文言にからんで、「どこに闘争などあるのか。闘いがあるのか」と教組運動をこきおろしていると、書記室から出てきた山田さんが「なめたことをいうな。ここにある一つ一つの言葉は、長い闘いの中で洗練され、きたえられてきた言葉だ。」と言った。キシヨタオセ！と叫びながら「闘争」してきた自負は一変して教組運動に対する全くの無知を思い知ることになった。それが、ふたりめの悪党との出会いといえば出会いであった。

あの一斉糾弾という、あり得べからざる季節については、もういいだろう。ただ、あのとき、私は毎晩遊び回っていたことを白状しなければならない。あの不運にして、くそまじめな「影

とやさしさ」（明治図書）の裏面といってよい。それが支えだったなどというつもりはないが、「遊び」を一方の極に置くことで、バランスを保とうとしたとはいえる。カメラと映写機を持った少年、演劇好きの看護婦、シナリオを書いている小学校教師、イベント彫刻を試みる学生、新宿流れ者の舞踏家と、ギターリスト、グルメ好きの寺の坊主、白系ロシア人のフーテン娘、などと、「糾弾」のあと三宮（主として喫茶バンビ）で落ち合った。「あの美しさを扼殺してはならない」と題した催し物をしたこともある。一軒のバーを借り切り、客に太目のローソクを持たせて火を点け、店内中央に垂らした幕に、坂道を上ったり下ったりする三輪車を映写し、ギターの伴奏で詩を朗読する。神戸初の小劇場運動などと持ち上げたタウン誌の記事もあった。今、一人はフリーライターになり、一人は売れる彫刻家になり、一人はこれも売れっ子の童話作家になった。一日中、細胞がはじけていた。それに恋もした。一斉糾弾の火も衰え、遊びの火も消えた頃、「影とやさしさ」が出版された。長い間県神戸同教の倉庫に放置されたままだった。あの本の束はどこへ行ったんだろう。発行とほぼ同時に私は加古川に飛んだことになるので、ついにその行方を知らない。

一九七八年　青雲高校・畝本教諭懲戒免職―青雲弾圧ピークとなる。林竹二（宮城教育大学学長）による解放教育への「干渉」始まる。

一九七九年　湊川から加古川西高校へ強制配転

一九八〇年　県立高校組合活動家への政治的強制配転激化

一九八六年　離婚

一九九一年　再婚

一九九八年　四月　加古川西高校から県立農業高校（定時制）へ希望異動

二〇〇一年　三月　定年退職

七〇年代後半の「弾圧」――私的には加古川への強配は「望んだ」ことであったというと語弊があるかも知れない。しかし、強配か、裏切り（何よりも自分への）かといえば、強配を「望む」という生き方を何人もの人たちが選択したのは事実だ。「あいつには近寄るな」といわれつつ、何人もの強配者たちがまだ暗い闘いの中にいる。私は退職するが、最後までしっかり立っていてほしい。

この時期―県と林竹二という三流学者と、そのエピゴーネンの結合―の正確な跡づけは、昨年楠高校を退職した原田嘉男の原稿「転向をめぐるいくつかの事実とさしあたっての総括」（「むらぎも十」号）に詳しい。しかし、残念ながら、「弾圧」が一つの「家庭」を直撃するのに、それほど時間はかからなかった。それへの怨みは果てることはないが、自分の半生のうちで最も「いとおしい」ものとなったのも、この強配以降、配所での二十年だ。その気分は今も続いている。

これ以上、この「経歴」につき合っていると、最後の二〇〇一年でほんとに最期になるようで怖い。以上、思いつくままの、私史断片のお粗末。

あとがき

私は、この小文の連載にあたって、次のような文章（「納庄さんの余韻」）を書いた。

適当に場所を空けておき、不満の火種とならぬよう、あたらずさわらずに処すること、――ある年の、強配者に対する教頭会のレクチャーの一節だ。適当な場所を確保するのにあたりもし、さわりもした一、二年が過ぎた頃、同期の強配者であるFさんは、いつ訪ねても職員室で毅然とした眠りについていた。あたりを見ると静かなのだ。そういってよければ、ある種のやさしさが支配していた。奥に納庄さんの顔があり、死去されたNさんやHさん、Sさんの顔があった。知らぬ気に何か仕事をしている。これは、この人たちが確保している静けさなのだと思った。いや、そうでなく死守していた静けさだったのかもしれない。というのは、この学校に管理のしめつけが展開されるのは、納庄さんが明石西に強配された直後であったから。……

その初回分からほぼ同じ七十回の連載になるということは、私の想定をはるかに越えていた。神戸湊川から播州の地へ強制配転されたという記憶からの巻き戻しを何度か試みているような文が、この他にも何篇かある。それらの文がひとつの時代の意味づけを目論んだものなどではなく、さらに、たんなる回想でもないことを、ことわっておきたい。この初回の文のポイントは、「納庄さん」であり、あるいは、「死守していた静けさ」なのである。ひとりのこと、ひとつのことである。雑文集の原型と思っていただきたい。

回想におちいらず、ひとつの時代の、ひとりを取り巻く背景、関連するものや、ことをいかにていねいに描くことができるかといったことにこだわった。こだわりながら過ぎてしまった七年、七十回

ということになる。

最終回（一〇〇号）では、どこにもいそうな父親と、どこにも転がっていそうな迷いのことを書いたのであり、「実践報告」などではさらさらない。「実践報告」はもはや成り立たない。退職間際の実感でもある。

ほぼ、夜の十一時を過ぎている。その父親は話を終える気配がない。シンナー吸引の現場を見つけられた娘の引き取りにやってきた彼は、交友関係における問題点、警察の怠慢、売人の存在、金銭の授受に伴うかつあげの事実などを話つづけるのだった。小さな職場の組合活動家だという彼のはなしぶりは、メリハリの効いたものではあったが、ふと見せる無力感が、そのひといきの話に奇妙な抑揚を与えているふうだった。

ふてくされる娘の後を歩く彼の姿が、暗闇に消えて、われにかえった。ごく私的な話に付き合ったようでもあり、極めて公的な問題提起をされたようでもあった。公的という立場でなら、シンナーをやめさせるため、処分を含めた「特別指導」などに入ることになる。が、その公的なる方針が、ひとりの少女を救うものではなく、むしろ、学校から遠ざける形でしか、働かなくなっていることを、みんな知っている。私的な話として聞くなら、「朝が遅い、すぐ家をあける」といった、いわば〈とるにたりない〉内輪の話しにどうつきあうか、ということになる。しかし、現実把握の入口は、やはりここしかないだろう。見えねば何も始まらない。見る前に始めてしまうことの何と多いことか。

自分の過ちを探し、人前でそれを告白すること――そんな、教師側からする断固とした要求がかつてはあった。それに応える生徒がいた。その逆も、たまにはあった。父と子の関係においてもしかりだ。いま〈とるにたりない〉現実が、私たちに見えなくなっている。正確にいうなら見ようとしなくなっている。見る必要がない、見る権利がないと屁理屈をつけている間に、現実把握の方法を、すべて台なしにしたのではないかとさえ思う。（後略）

読み返してみれば、やはり独白のモザイクといった趣きでもあり、まあそれはそれでいいかと……。田崎純爾君の、月一回はかかってくる締め切りを告げる電話と深夜のＦＡＸ送信が、離人症か失語症に近い偏向の中にいた私を救ってくれたといえなくもないのだ。繰り言から始めて、その内「表現」という水脈にぶち当たれば、読者諸氏への失礼も払拭できるか、くらいに考えていたところがある。

払拭できたかどうかは、諸氏の判断におまかせするしかない。この本の編集が話題になったころ、浅田修一さんが亡くなった。退職したら「映画をとろう」と約束していた。もはやその実現は不可能だ。彼がいたら、編集を手伝ってくれるはずだったが、そのかわり、田崎君と金山健二君が、すべてをひっかぶってくれた。合掌、そして感謝。（二〇〇一・三）

石を蹴る
―正しさばかりが降りつもり
二〇〇一年三月二〇日
著者　古林健司
加古川市平岡町新在家九一五―五
TEL(〇七九四)二二―一九四六
発行　兵高教東播支部
編集　「東播通信」編集部
印刷　ミウラ印刷
神戸市中央区中町通四―一―十九
TEL(〇七八)三七一―七五二一